

公益財団法人 母子健康協会
第39回シンポジウム
「子どもの心を育てる保育」

日時 平成31年2月13日(水)午後2時～5時

場所 アルカディア市ヶ谷(私学会館)

座長 東京慈恵会医科大学 名誉教授 前川 喜平

講演

1. 子どもの心の発達

東京慈恵会医科大学 名誉教授
前川 喜平

2. 子どもの心を育てる保育

早稲田大学 人間科学部 教授
井原 成男

3. 保育における愛着形成

元 明星大学大学院 教授
NPO法人 狭山保育サポートの会 代表
諏訪 きぬ

4. 総合討論

5. 会場の皆様から頂いたご質問とその回答



【前川】 本日は、子どもの心を育てる保育を企画いたしましたところ、たくさんの方にご出席いただき、感激しております。

この問題に対する皆様の期待に応えるべく、素晴らしいシンポジストを用意いたしました。経験豊かで、その道の大家です。子どもを育てることは親を育てることですので、事前の質問で多数ありました親への対応についても、満足がいく回答が得られる先生方でございます。短い時間ではありますが、講演を拝聴し、少しでも得ることがあることを期待しております。

それでは、シンポジウムを始めさせていただきます。最初は私が、子どもの心の発達についてお話をいたします。レジュメとスライドが多少異なっていますが、



ご了承ください。レジュメを見ないで話を聞いて、後でわからないことがあったら、レジュメを見るようにしてください。

子どもの心の発達

東京慈恵会医科大学 名誉教授

前川 喜平

ご存じだと思うのですが、子どもの心は母親の養育態度に影響されます。子どもを思う母親の愛情が強過ぎて弱過ぎて、心は育ちません。母親の関わり方には、過剰な関わり方、適切な関わり方、それから希薄な関わり方の3種類があります。希薄と過剰はどちらも程度がひどくなるほど、子どもの心は育たなくなります。

妊娠中の母親には子どもを育てる力が、胎児には育つ力が遺伝的に組み込まれておりますが、子どもを生んだだけではスイッチが入らないようにできております。肯定的妊娠で周囲に支援する人が存在する母親は、分娩と同時に同調する能力が芽生え、赤ちゃんが泣くと、おむつをかえたり、抱いたり、母乳を与えたり、あやしったり、

妊娠中の母親には子どもを「育てる力」が、胎児には「育つ力」が遺伝的に組み込まれています。子どもを産んだだけでは両者共にスイッチが入らないように来ています。

世話をして赤ちゃんを泣き止ますし、快の状態にします。この反復により、赤ちゃんは、自分は守られている、安全だ、母親は信頼がおけると、人に対する信頼感が芽生えます。これが子どもの心が育つ第一歩です。それから後は赤ちゃんが出すサインに母親が応え、母親が出すサインに赤ちゃんが応え、赤ちゃんは赤ちゃんらしく、母親は親らしく段々と育って行きます。ただここで注意しなければいけないのは、6か月児の母親は6か月の未熟な何も知らない母親であると言いうことです。これを母子相互作用といいます。赤ちゃんは「触れ合い子育て」のための不思議な能力を持っています。赤ちゃんは、目が見え、人の顔の輪郭をしたものを最もよく見ます。最もよく見える距離が20センチプラスマイナス3センチで、これは母乳を与えている赤ちゃんとも母親の目の距離

母子相互作用のための赤ちゃんの不思議な能力

- ①目が見える：人の顔の輪郭をしたものを見る。
- ②最も見える距離は20cm+、-3cm
母乳を与えている、母と赤ちゃんの目の距離
- ③子どもを育てている母親の声に最も反応する。
- ④母親の声や匂いが判り、そちらに抱きつく動作をする。
- ⑤新生児の模倣動作：世話をしている人の真似をする。

同調を阻害する因子：要支援家庭

- ① 親個人の問題：
10代の親、慢性の身体的・精神的病気、知的障害、教育の欠陥、人格の障害、アルコール中毒、薬物乱用、親になれない親等
- ② 経済的・家庭的問題：
貧困、ひとり親家庭、失業、定職なし、不穏な夫婦関係、社会的孤立、
- ③ 子どもの問題：
慢性疾患、障害児、育て難い児、多胎、

する能力を妨げるということですが、同調を阻害する因子は、いわゆる要支援家庭のことですが、時間がありませんので後でこの表を見ておいてください。

どの民族でも、肯定的妊娠の場合、はお産した後、母親は赤ちゃんを

抱いたり、さすったり、語りかけたり、母乳を与えたり、自然のスキンシップを行います。新生児も不思議な能力で母親に反応し、ここで初めて親と子の「触れ愛」が起こります。「触れ愛」に愛という字を書いたのは、愛情がない母親は触れ合いの動作が起こらないからです。この「触れ愛」により、母親の「育てる力」と赤ちゃんの「育つ力」にスイッチが入ります。それからあとは、乳児が出すサインに母親が応え、母親が出すサインに乳児が応えます。母親は母親とし

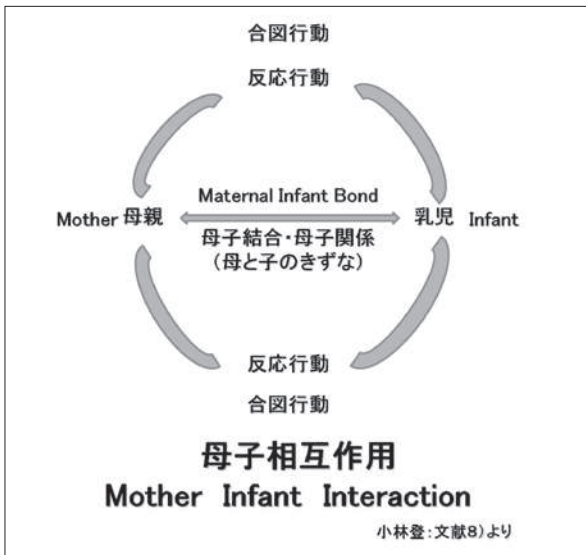
離です。新生児は、子どもを育てている母親の声に最もよく反応します。母親の声や匂いがわかり、そちらに抱きつくような動作もします。新生児は、世話をする人のまねをしたり、リズムをとって身体を動かしたりします。

富山にいる私の息子夫婦に赤ちゃんが生まれ、北海道にいる息子の妻の母親が赤ちゃんの世話をしに来ておりまして、私たち夫婦も孫の顔を見に行った時の話です。向こうの母親が「赤ちゃんを世話しているときと真似をする」と言うのです。挨拶を手短かにして撮ったのがこの写真です。語り掛けると口を開けて真似をしております。この孫娘は、現在、高校に行っています。



同調能力に影響を及ぼす因子として、妊娠中から出産まで愛着を与え続けられている母親は、出産後も赤ちゃんへの同調がよい。母親自身が過去によい愛着を体験している人は、同調する能力が高い。反対に、トラウマとかは愛着行動を阻害する強い不安や鬱は同調

て、乳児は月齢相当に育っていきます。これを母子相互作用と言います。先程お話しした様に、4ヶ月児の母親は、4ヶ月の未熟な母親であることをお忘れなく対応してください。



これは母子相互作用のスライドです。お互いにサインに答え合って、親は親らしく、子どもは子どもらしく、育って行く図です。

養育者が子どものよいも悪いも丸ごと受容して、触れ合いを行っていきますと、養育者と子どもとの間に情愛の絆が形成されます。これをアタッチメントの形成と言います。

愛着形成は子どもの心が育つ基本です。愛着形成がなされていると不安などの激しい感情がおこったときに自然に感情が収められる事と、母親を安全基地として探索行動をおこない、母親から自立していけることです。愛着形成がなされていないとその先の心の発達が困難となります。子どもは、常に防御行動をとるようになります。ボンデング障害につきましては、後ほど井原先生の講演があります。いろいろな不安や怖い感情が起こったときに母親に「くつつき」、不安を和らげ探索行動を行い、甘えと反抗を繰り返しながら子どもは自立していきます。母親を安全基地として「くつつき」、それを鎮めることが

アタッチメントの形成

養育者が子どもの良いも悪いも丸ごと受容し、子どものサインに適切に回答「ふれあい」をしていると、養育者と子どもとの間に情愛の絆が形成されます。これをアタッチメントの形成(情愛の絆)の形成と言います。

できます。再び親から離れ探索行動の旅にでます。これが育っていないと、かんしゃくだとか自己調節障害が起こったりします。愛着が育っていますと、間主観性、これは相手の気持ちが理解されることで、思いやりが育ちます。相手の様子を見て、悲しい、嬉しい等は判るのです。

次に愛着障害の身体的影響です。ホスピタリズムは入院して親が来ない赤ちゃんは元気がない、寂しい状態となります。それから愛情剥奪性小人症です。身体的調節障害とか食事や睡眠リズムの障害、さらには認

愛着障害の身体への影響

- * ホスピタリズム
- * 愛情剥奪性小人症
- * 身体的調節障害: 食事や睡眠のリズムが障害。
- * 認知・感覚・運動機能の障害

知・感覚・運動の障害も起こります。愛着形成は心の発達の基本であるばかりでなく、身体的にも影響を及ぼすのです。園で乳幼児の世話をしているとき抱きしめたり、語りかけたりなどの自然のスキンシップをする機会が増えてきます。乳幼児は、親にたっぷり抱きしめられたのと同じ効果になります。これ

によって、乳幼児は心の安らぎと、人に対する信頼感が増加します。ですから、乳幼児の世話をする人は、子どもをかわいいと思い、子どもの世話をすることに喜びを感じていれば、子どもの心は育ちます。

親を育てる事は大切です。母親の周囲に支援する人や悩みを聞いてくれる人がおり、傍に居るだけで親の気が休まる人がいれば、親の心は育っていきます。

事前の質問に「親に対する対応」が沢山ありました。総合討論で応える前に、人の心は鏡です。

相手を受容し好意的な気持ちで接すれば、肩を張った親の気持ちも緩んできます。お互いに信頼関係が成立すれば、話し合いが可能となります。

情愛の絆の形成とエントレインメントと書いてありますが、子どもの心が育つには、サインに対してお互

保育士や幼稚園教諭

乳幼児の世話をすると、抱きしめたり、語り掛けたりなど自然のスキンシップ(ふれあい)をする機会が増加します。乳幼児は親にたっぷり抱きしめられたのと同じ感情となり、心の安らぎと人に対する信頼感が増加します。

いが応えて、それを繰り返すことで子どもの心は育っていきます。それに就いて少し話をさせて戴きます。

親子の関係性は、誕生以前から育まれています。子どもは、誕生までの10ヶ月間、母親の子宮内で、母親の生活全てを感じとっています。誕生後も、母親の働きかけに反応して、お互いに行動を起こし合っております。その反応が、穏やかに育まれることによって、段々と絆がつけられていきます。このような響き合い、同調性の反応を、クラウスとケネルはエントレインメントと名づけております。

幼児期になると、子どもみずからの探索が始まります。遊びすなわち学びとなります。よく遊ぶことがよく学ぶことなのです。大人との人間関係が安定していると、自信を持って母親から離れ、未知の世界への挑戦をしようと試み、新しい発見が見つかります。子どもの育ちに寄り添うことは、子どもが安全で安心してみずから学び、遊ぶという環境を整えることが、最も大切なことです。この場合、子どもは何ができ、何ができないかの視点ではなくて、愛着形成と探索行動から子どもを見るのが大切です。

情愛の絆の形成とエントレインメント(響き合い)

親は、子どもの誕生によって生物学的には親になりますが、いわゆる親として成長するのは、子どもを育てることの実体験に基づいて親として育っていきまします。つまり、親は、子どもが3歳になれば、親年齢も3歳になると言うことが大切です。

子どもへの眼差しは、安心・安全な基地を保障することです。乳幼児の心の育ちには、生活基盤の安全基地の保障、対人関係の安全基地の保障、それから社会性（生活している場所や時間の中で自分の存在を感じる）の安全基地の保障などがあります。

生活基盤とは、日常の衣食住であり、家族機能としての経済的側面も含まれます。対人関係では、何といっても母親との関係です。家族を形成している父親との関係もあります。

社会性の保障とは、子どもが家族として存在していること、そのことが家族にとって意味ある存在であることを子どもが感じられるような生活を送ることです。

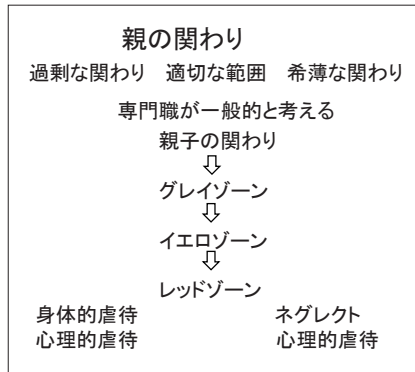
生活基盤とは、日常の衣食住であり家族機能としての経済的側面も含まれますし、対人関係では、何といっても母親との関係です。家族を形成している父親と子どもとの関係もあります。

この図は、適切な範囲のかかわり方があって、その両側に過剰なかわり方、希薄なかわり方があります。その程度により、グレイゾーン、イエロージーン、レッドゾーンとなっていて、過剰なかわり方の最終的なことは身体的虐待と心理的虐待、希薄なかわり方の最終的なものはネグレクトと心理的虐待です。

過剰な関わり 身体的虐待・心理的虐待

- ①力を持って制する
- ②子どもを否定・否認する態度を示す
- ③威圧的な言葉掛け・叱責・怒りを子どもにぶつけ制御する
- ④子どもに過剰な干渉をする・理想や期待を押し付ける

グレイゾーン、イエロージーン、レッドゾーンは関わり方の程度で軽度、中等度、重度を表しています。



これによって、子どもの自尊心、自己肯定感が育ちます。

これは希薄な関わり方の図です。

希薄な関わり ネグレクト・心理的虐待

- ①親自身のことを優先して考え親役割や責任に欠ける
- ②子どもの生活リズム・生活習慣・衣食住などが整えられない
- ③子どもの発達に合わせた対応・時間共有ができない
- ④子どもの意図・サイン・気持ちが届み取れず、寄り添うことができない

希薄な関わり方は、力を持って子どもを制する、子どもを否定・否認する態度をとる、威圧的な言葉掛け・叱責・怒りを子どもにぶつけ・コントロールする、子どもに過剰な干渉をする、理想や期待を押しつけるなどです。

過剰な関わり方は、力を持って子どもを制する、子どもを否定・否認する態度をとる、威圧的な言葉掛け・叱責・怒りを子どもにぶつけ・コントロールする、子どもに過剰な干渉をする、理想や期待を押しつけるなどです。

喜びを感じる、子どもの長所、短所、よいところ、悪いところを丸ごと受け入れるということです。どんなときでも子どもの味方になるといことです。

愛着形成があり、励ましと褒めることによってしつければ達成されます。怒るときは感情的にならない。3秒待ち、どんなことがいけなかったかを具体的に説明します。一回で理解したとは思わない、直らないのが当たり前です。子どもの気持ちを酌んでください。どうしてそんな気持ちになったのか、話を聞く、結論をすぐに出さない。何回も話し合ううちに、自然に問題は解決していきます。

子どもとの生活は、一緒に親子が遊ぶだとか、一緒にバーベキューや何かをするのですが、必ず子どもに役割分担を与えることです。小さい子どもは絵を描きながら目があったりなんて、直さないことです。良く描けたと誉めて下さい。子どもは遊びによって育つので、なるたけ子どもが安心して遊べる環境をつくるのが大切です。よいことをしたらすぐに褒める。それから、親は象さんになるといことです。優しい目、大きな体、これは頼りがいがあるからです、耳が二つで口が一つ。小言を言う2倍、子どもの話や気持ちを

聞くことが大切です。

親子は何でも相談できる間柄になるということで、子どもの人格の尊重です。自分が好きになる、そういう自尊感情、自己肯定感を育てる。子どもを育てるときには、幅が広い道を想定して、そこをはみ出さなければある程度大丈夫だという余裕がある子育てをしたらいいのではないかと思います。何か子どもが手伝わってくれたら、有難うと言うことです。今の親はめつたに言いません。それから、思春期は自己同一性の確立です。子どもが育つには、丸ごと子どもを受け入れる母親的な人と、社会生活を厳しくしつける父親的な人が必要です。適当な人がいれば、一人親家庭でも、子どもの心は育つことができます。

日本の子どもは自己肯定感が低いと言われております。この感情は、誰からも必要とされない、誰からも大切と思われていない、それから生きる価値がない人間だと思感情です。これが育っていないと、人生がまともに生きられません。このような子どもが育つ理由は、親の言うことを聞く、手のかからない良い子が多いからです。子どもが持つ欲求や反抗を抑えている親子関係が希薄な親子が多いからです。

子どもは、依存と反抗を繰り返し、甘えた子が自立を

と言葉で伝える事です。子どもはうれしいし、喜びます。「子どもが居て嬉しい、幸せ」と話します。子どもが親のことをしてくれた時は「有難う」と言います。「有難う」は、子どもに対する最高の褒め言葉です。今の親はほとんどこれを使いません。ですから、自己肯定感が育たないのです。

これは、明橋大二先生がタッチケア研究会のときに示したスライドです。子どもの心の土台は、自己肯定感を育てると言うことがこれで示されており、子どもに自己肯定感を

育てる言葉「よくやった、

ありがとう、おまえがいてうれしよ、これから頼むよ、失敗しても大丈夫、必ずできるよ、お父さんは信じている」等です。園で子どもの自尊感情と自己肯定感を育てる事は重要なことです。

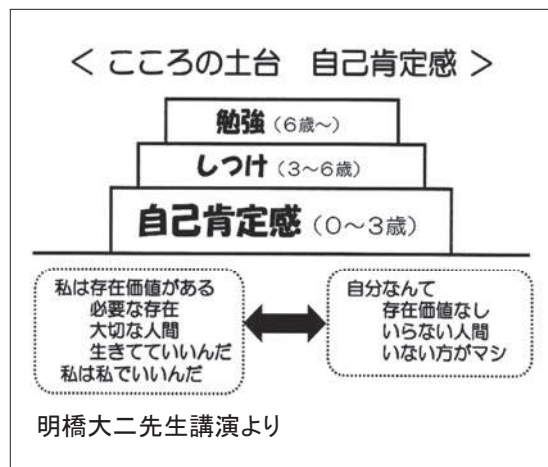
子どもと接している保育士や幼稚園教諭は、子どもの良いところを見つ

子どもの心に自己肯定感を育てよう。

- * よくやった！
- * 有難う。
- * お前が居て嬉しいよ
これからも頼むよ
- * 失敗しても大丈夫、必ずできるよ
- * お父さんは信じているよ

します。よい甘えというのは、子どもの情緒的要求に親が応えること、悪い甘えは、子どもの物質的要求、子どもの要求に物で応えることです。この理由は、親が多忙で子どもの情緒的要求に応えられないからです。

例えば自己肯定感を育てるには、泣いたら構ってやる、子どもの話をよく聞いてやる、気持ちを酌んでやる、テストが6点でもそれを認め褒めてやる、何かしてくれたらありがとうという言葉を言う、よくやった



けて褒めてください。持っている良いところを具体的に伝えてください。子どもは甘えと反抗を繰り返しながら育ちますので、子どもが来たら、うんと甘えさせてください。たくさん子どもに甘えさせることが、子どもが自立する早道なのです。

子どもが親から離れて自立するのに必要な心は、自己肯定感と自尊感情です。養育者は、子どもの欠点や悪いところを直そうとしますが、これは間違いです。子どもが生きる自信をなくし、駄目な必要がない人間と考えてしまうからです。

甘えさせて、褒めて、子どもがいることを親が心から喜んでいれば、子どもは自分が必要な人間とわかり、自尊感情や自己肯定感が育ちます。保育をしている人も同じです。子どものよいところを見つけ、褒め、うんと甘えさせてください。これが子どもの心が育つ保育です。園における幼児の保育について、ブランコの立ちこぎ、滑り台、鉄棒にぶら下がるなどの実体験をさせてください。挑戦して出来なかった時の挫折感、何回か挑戦してできるようになった時の達成感、失敗して転んだとき疼痛等、好きなオモチャを他の子が使っていて、自分が使いたいたときのコミュニケーション、意地悪、けんかの対応などは子どもの時に経験すべき

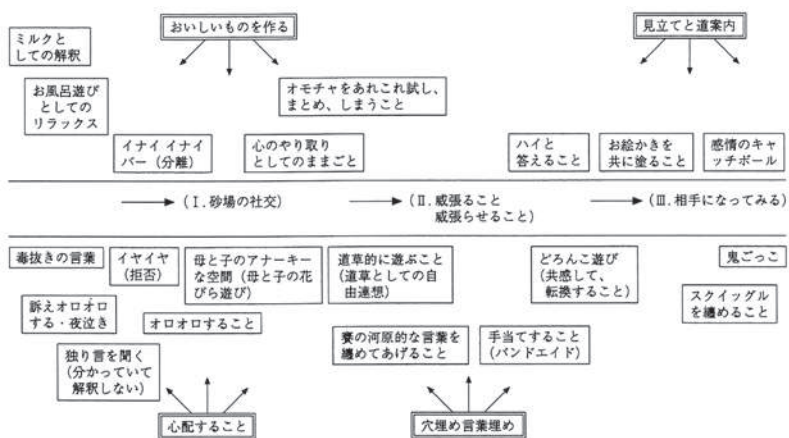
ことです。園で出来る範囲で子どもに体験をさせてください。実体験が無い親が多くて対応に困っております。

これで私の話す内容は終わりました。今の講演で特にわからないことがありましたら、質問をください。そうでなければ、総合討論のところ、全体についての質問は受けさせていただきます。

次は、井原先生に、母親の障害と子どもの愛着形成障害、ボンディング障害のお話をいただきます。井原先生は、臨床心理士として、30年以上にわたり、東京慈恵会医科大学小児科で子どもたちの問題について対応してきました。育て直し、箱庭療法、子どもの描いた絵などを分析し、支援に役立ててきました。アタッチメントの理論は、探索とアタッチメントの2軸があるのに、実際は探索がないがしろにされております。2歳過ぎになると、母親を安全基地として、子どもは探索行動を行います。探索行動という自立の旅に旅立つのです。そして、いろいろな経験をjして、反抗と甘えを繰り返しながら、母親から自立していくのです。このことを知って、先生の味わい深い話を拝聴してください。

それでは、井原先生、よろしくお願いします。

まとめの表、「育て直しと発達の里程碑」は左の図の通りです。



子どもの心を育てる保育

早稲田大学 人間科学部 教授
井原 成男

前川先生、ありがとうございます。

前川先生は私にとって、年はそういう関係にならないと思いますが、お父さんみたいな、育ての父親という感じです。配布された、こんな立派なパンフレットをつくっていただいて、これを全部話すわけにはいきません。一つの物語風になっておりますので、今日付け加えるところをもとにして、ぱっと見ていけばわかるという形になっています、後ほどゆっくりご覧ください。

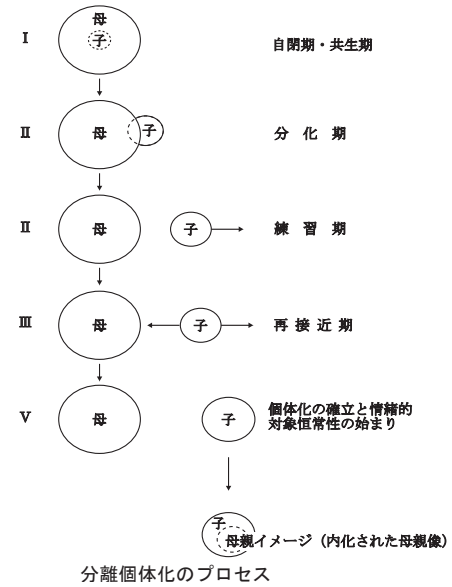


わたしの話はアタッチメントが壊れたあるいは不十分な子にどのようにそれを改善していくかという話です。

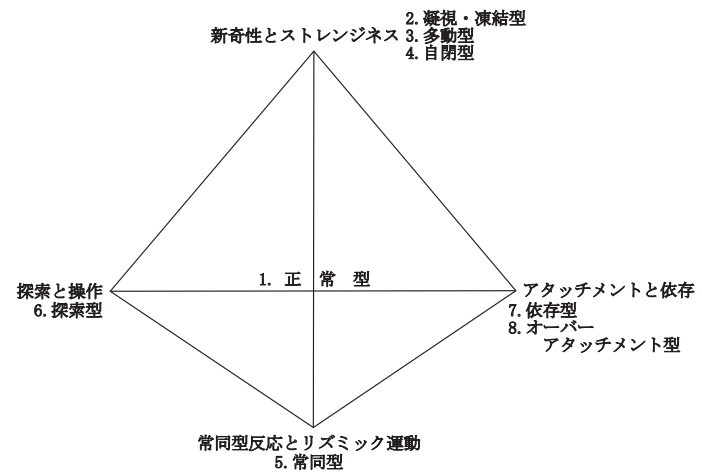
最初にアタッチメントということを言い始めた人々は、実験心理学の人たちです。すごい実験、赤ちゃんにとっては過酷な実験です。どういうふうにしてやっていたかというエインズワースの実験 SSP が、大きい図にして出ていますので見てください。

「育て直しと発達の里程碑」は私が前川先生のもとでやったことから考えたことです。前川先生のところ、結局、医局時代、35年間、いさせていたで、臨床心理士は本業だけでは食っていきません。今年やると国家資格になりましたが、食っていけないので、途中から大学に移りました。大学に移って、ずっと臨床をやってきて、しばらくアタッチメントという概念を忘れていましたのですが、育て直しということにとっても似ているのではないかと思えばまとめると、こういう1枚の表になった。

あと、子どもはどうやって母親から離れるか、今、前川先生に話していただいたのを、次のページの分離個体化の図で見ると、(今では一番、最初のお母さんの中に子どもがいるとかいうのは否定されています) 実際はIIから始まる、Iを入れるとこれじゃあお母さんの中に飲み込まれているような、図になりますので、これは否定されています。



小嶋の4因子仮説



それから、左の図の4因子仮説、これは、今になってその価値がわかる、貴重な考え方です。早稲田大学の恩師の小嶋謙四郎先生は、まだご存命で、90を超え

ていらっしゃると思うんですが、小嶋先生が若いころに、我々は18、19歳のときの悪いゼミ生の集まりだったのですが、そこでこの概念を言い始めたボルビイという人が、まだ存命の頃でしたが、直接訳して、訳してといてもほとんど小嶋先生が訳していました。

先生は予習もしないでやってきて、その現場で訳していくのを横で我々が見ているという、今では考えられないような、今ならそんな先生は首になっちゃうと思います。そういう授業をされていて、それがとても味わい深くて、そこにいた五、六人のゼミ生はみんな、その後、臨床家になって、かつ、どこかで教える立場になってユニークな臨床家にして教育者になっています。

自立、一人でいる能力無くしては受容に意味もないという、自立とアタッチメントは車の両輪であるという考え方です。

先の前川先生のお話の中にこの表の学術的な部分は全て含まれています。こういう学術的なバックボーンをもつてらして、何も文句を言わない前川先生の教室で心理の仕事をし、ずっと親子(母子)に会ってきたということが、私のアタッチメントを育てて、自立して私は力の限界まで育つたんじゃないかなと思います。

ついでに子どもも育てまして、パートナーが家庭裁判所の調査官、非行少年を扱う仕事をしていました。ずっと共稼ぎでした。今ではそんな呼び方しませんが、共働きと言います。もはや両方が仕事をし、子育てをするというのは当たり前です。

基本的に親子に会って、そこで一緒に遊んで、心から自由に遊んでいくうちに治っていった。私の御師、小嶋先生もそういう体験をもつ先生で、若い頃、大学を出てから長野赤十字病院に勤め、子どもとままごとして、子どもを治してしまう先生がいるということ、有名になった。だから、親つまり小嶋先生と同じような道を私も歩んできたと思います。

それから、前川先生という、いい親を得て育っていききました。育つって、こういうことなんじゃないですかね、良き関係をもたらしてそれを次世代に伝えていく。アタッチメントという難しい言い方をする必要もない。そしてもらっていない人には保育の専門家があげればよい。ことは単純です。

私の好きなイギリスのウイニコットという分析医で、かつ小児科医の人がいます。小児科の仕事もずっとやっていて、同時に心の分析、治療もやっていたという、私はそういう経歴自体がとても好きなんです、彼が

言った言葉の中で、「ほんとうに遊べる人は病気にならない」と言うのがある。これは体の病気ではなくて、心の病気のことです。また、彼は、1950年代の当時から、子どもの病気の半分以上は情緒的な問題だというふうに見抜いていた。ということ、座右の銘にしております。

ついでに言うと、彼が言った言葉で、「ひとりの赤ちゃんなんていうものはいない」というのがあります。小児科医としての経験から言ったのですが、これもとても深い言葉です。赤ちゃんというのは大体お母さんの膝に乗っかって小児科の診療にやってくることを彼はよく知っていた。その状態から、子どもがどういうふうに育ち、自立し、一人立ちして離れていくかを見ていた人です。

私は小嶋先生の鬼っ子でしたので、真面目にいう通り勉強していれば学者になったんでしょうけど、それはやめました。私に一番関心があったのは、アタッチメントが壊れちゃって、あるいは虐待的に壊れたというのはもっと次元が違いますけれども、そうじゃなく、通常の生活の中で壊れた人をどうやって直したらいいかでした。しかも小児科でしたので、育児相談から始めて、「こういうふうにやったら、育児はいいのじゃな

を何人分も生きられることはない」みたいに答えました。ちょっと格好つけた言い方ですけども、ほんとうにそう考えてました。

それが多分ずっとこういう仕事をやってきて、今は臨床はやっていません、学生さんが臨床の相手です。今の若者は大変だと思えます。どう情緒的に触れあえないかとかわからない、経験してないし、教えてももらってない。ある偏差値の高い大学でロールプレイをやらせると、お母さん、お父さんの役でプレイセラピーをするのはみんなできるけど、子どもの役をやらせるとフリーズしてしまう、それぐらい知的に、特にそこは、名前は言えませんが、とても知的な大学なので、そういうふうな知的な部分ばかり発達していて、情緒は育っていない、A Iみたいな学生たちが多い。スマホは情緒の発達を阻害すると言いますが、無しでは若者と付き合えない。私も実は昨日、スマホにかえました。遊び心を刺激されてはまりますね。

例えばアイコンで泣いている猫の絵がついている。そのの送り方がわかったので、いつも安易に泣いている猫を送ってばかり、考えなくなる、テンプレートになります。猫の困り方や鳴き方だっているいろいろあります。今の学生を見て言えると、そういうのをパパパ

い」と、お母さんと一緒に考えてやってきました。壊れたというのはい過ぎです、足りなかった方がいいですね、足りなかった子どもたち、親子を、どんなふうにもそこから回復させればいいのか考えてきた。

甘えでも依存でもいい、それが子どもを育てるという認識が基本です。依存と甘えはちよつと違います。甘えというのは、きっと私が一番先にスライドで述べた、愛情関係だけじゃなくて、遊びも入っている。子どもって基本的には遊び好きです。我々もそうです。私は学生にはいつも、修士論文を書く人にも、こんなに大変なことをやるんだから、楽しくやらなきゃ続かないよって言います。遊びなくしては困難なことはやれない。本好きなので、本がお友達みたいなところもあり、万巻の書物を読みました。あとは前川先生のところで小児科の臨床をやって、今振り返ってみると、楽しいことでした。

よく看護師さんに、「先生、大変な話ばかり聞いて頭がおかしくならないですか」と聞かれました。「もともとおかしいですから」といったら冗談が通じるかどうかわからないので、「それはとても楽しいことで、いろいろな人の人生と一緒に歩いていくという、おもしろおかしい遊びはあるけど、こんなに深く、かつ、人生」とやっちゃうのです。あの能力はすごい。だけど、情緒的に困ったときとか、嫌になったときに、嫌になった相手からどんないいところを引き出すとか、そういうのは多分ほとんど育っていないと思います。

つまり、昔であつたら、今日ここにお見せしているスライドにも例が大分入っていますけど、普通だった遊びがわからない。お見せしている絵は20年ぐらい前に『ゆうゆう子育て』という遊びの本をつくった中のものです。当時は笑われました。なんでこんな誰でも知っている遊び教本が必要なんだと。でもその後、だんだん需要が増えて、遊び方を指南する本としてずっと売れ続けた、隠れたベストセラーです。最初は、厚生省への宝くじ協会か何かの寄附金を2,000万円ぐらいももらったお金でつくって全国の保健所に配布した本でしたが、店頭で売れる本になった、今も売っているかもしれませんが、そういうことになった。この経過にあらわれているように、当たり前としてあったことを、どうやって教えていくかが必要になっている、とても難しい時代です。

一口で言うと、知的なこととタイムクレスポンス、それはものすごく早いし、ほとんどめまいがしてついでいけないくらいですが、しかし、困った相手とどうつき合

ールドワイドに戦場である怖い世界です。

そういう中で、アタッチメントというのは、後で説明しますが、安定も不安もあったもんじゃない、ABC型どころじゃなくて、D型という、アタッチメントそのものがないような、枠組みがないものが生まれる世界が背景にあると思います。

それから、これは私の弟子筋の人を連れてくれば丁寧の説明して下さる、若い人は

そこまで研究していますが、ルーマニア研究というのがありまして、それもやっぱり、チャウシエスク政権の崩壊後、親が殺されたり、遺棄された子たちのための施設での研究によって発達した。

悲しいことです。実は初めのアタッチメント研究は、大体放っておけばみんなB型、つまり安定した形になるということ、一回下火になった。だけど、虐待とかPTSDとか、そういう問題、さらに今は戦争の背景の中で、再び脚光を浴びるようになったという悲し

アタッチメントの3つの形

A型 回避型

B型 安定型

C型 アンビバレント型

い歴史が、実はある。

よい保育者というのは何か。それは普通の子どもを育てるということ。虐待の悲しい現実があると、それが脚光を浴びるのですが、皆さんの仕事というのは、普通の子どもを育てることです。普通が一番難しい。私は小児科で子育ての相談から始めたというのはラッキーだった。すごく壊れた子どもではなくて、普通の子たちを見た。共に見ていくとそんなに悪い母親も父親も居ませんでした。普通であることを私たちは見ることも出来なくなり、紋切り型の切り方しかできなくなっている。一見普通でない人に紋切り型で対応して、もうにもなりません。そこらいかにして普通を見つけていくか、それが大切です。

あと、子どものよさは、子どもって前向きなのです。戦争中の地域に行っても、子どもってカメラを向けるとイエイエイこんなことをやって、そんなことやっている場合じゃないだろうって言いたくなりますが、ああいう前向きに今を生き力を持っていて、こんなに大変なのに三日たてばコロッと元気になる、そういう側面を持っている。

それは我々にもあると思います。基本的に、動物とはよく言ったもので、生き物っていうのは動く。後ろ

に動く人はいないので、大体前に向かって動くというのが基本にはある。

もちろん、そんな気楽なことばかりを考えているわけじゃないです。くよくよしても仕方ないと吹っ切ったのです。気楽でない世の中であるからこそ、そういう側面というのが必要だなんて。それがもともと持っている自己肯定感、それを雰囲気だけで引き出している役割を持つ人、それが最終的にはいい保育者だと思います。何か自分の力で相手を引っ張り出すみたいなおことを考えちゃうと、きつくなるんじゃないですか。それ自体が緊張した世界になる。

ニュースになる人、犯罪を犯す人って、非行もそうですけど、実は減っている。だけど、すごく不幸な事件が普通に見える人に起こる。外から見ると、人あたりが良くて普通にしか見えませんよね、今度のひどい虐待なんかはね。普通に見える世界が壊れていることが、数ではなくて、トピックになる。だから怖い。それはなぜなのか、我々の気づかないところで世界は壊れ始めている。世界はいつ破滅してもおかしくないことに満ち溢れている。それをこうした事件は刺激するのだと思います。

自分の中にもそれはある。よくお母さん方で、子ど

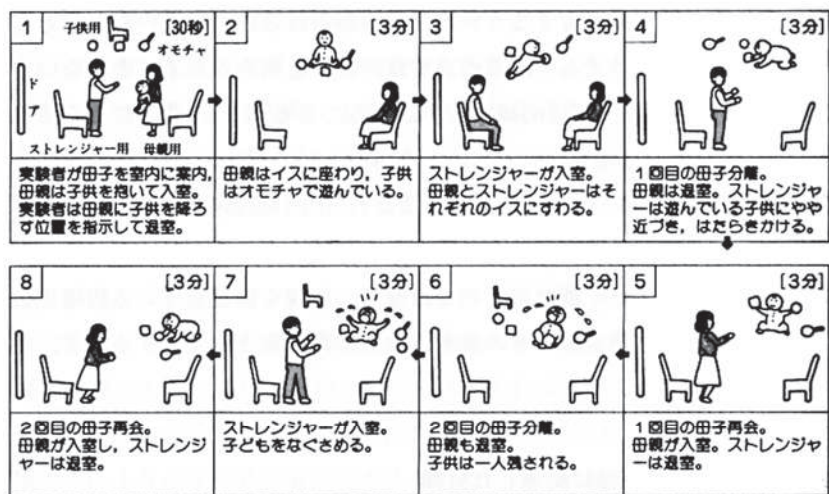
もをひっぱたいちゃったということです。ずっと悩んでいて、あまりに理想的なもの、できもしないものを要求されると、自分を責める親になっちゃうという気がするんです。私はよい親になれないって悩む人に、それ自分でもできないくせに、相談に来た相手に要求していると、理想化しすぎたものになります。その結果、先ほどのお話と絡めると、親としての自己肯定感を低めちゃうことになります。

前川先生、さすがに面白いことを言われていましたけど、親も未熟なんだ、未熟児ですよ、だからね。まだ発展途上だという発想が、こちらも楽にする。

私の書いた育児本は、自分も子育てをしながら、人の子育て相談にも乗りながら書いたものです。『子育てカウンセリング「育てなおし」の発達心理学』を10冊持ってきたので、欲しい方は持って行ってください。

自分の二人の子どもはもう大人になってこの本に書いた方法が良かったか結果が出ています。あまり純粹に育てちゃったので、苦労があるみたいです。それぞれ福祉の仕事をしています。一人は特別支援学級。最初から特別支援学級の先生になりたいと言って不思議がられた。みんなに高き理想を要求しないし、障がいのある子の方が人間らしく自然であると知っている。

SSP エインズワース



＜ストレンジ シチュエーション法による8つの場面設定＞

(図は永野 依田, 1983より)

親を見て育ったからだだと思います。純粹培養され過ぎて苦労が多いようですが、それは構わない。でも、そういう子に育つということは保証つきです。お金持ちにはなれないかもしれないけれども、こういう人が生きていてよかったなという人にはなれたと思います。私の誇りです。

問題児というのは、問題を持っていない人じゃなくて、問題を解くために生まれてきたんだっていう言い方がある、とても気に入っています。大変なんですよね、大変なんですけど、先ほど言った看護師さんの、そういう話ばかり聞いていておかしくなりませんか？というのは、本当にそのとおりだと思うんですけど、しかし、それを解いたときの喜び、できの悪い子ほどかわいという、ちょっと言い方がひどいんですけど、でも、そういうことに通じるのかなと思います。

では、次をお願いします。

これは先ほど前川先生に触れていたこと、アタッチメントだけが強調されて、特にB型というのは安定した形だと言われているので、それが強調されるんですけど、ほんとうは子どももって、見知らぬところに来ると、お母さんに顔をくっつけて、グニユグニユとして、その後母親から離れていく。自然に

てみる。それで判定している。ああ帰ったねと安定して母を迎える。そんなで過ぎた子がいるのかなと思います。ここでお母さんに怒ったり、くっついたりという厄介な子の方が私は自然な気がします。

あと、回避型というのが昔は少なかつたけど、増えています。今の大学生に聞いてみると、回避型が2割くらいになっています。つまり、相手に深く近寄らない。スマホ的につき合い方です。先ほど前川先生にいった例を挙げていただきましたけれども、これは必要上、出てきたんだと思います。

なぜ必要上かって、根拠を言うと、次の図を見てください。

日本のところを見ていただくと、大体8割は安定型でしょう。つまり、こんなに安定していたんです。だけど、そのころからドイツ、ドイツは既に一つのドイツになったのですが、49%がA型な

アタッチメントパターンの国による違い

(繁多 進, 1983)

国	A	B	C
米国(エインズワース)	21.7	66.0	12.3
西独(グロスマン)	49.0	32.7	12.2
日本(繁多 進)	6.2	79.2	14.6

離れて楽しく遊ぶ。これが基本だと思うのです。だから、自立するための依存のものを甘えという、いい日本語があるのだと思います。甘えというのは、多分ひとり立ちして、一人できることができる能力を育む。実は一人で何でもできたほうが気は楽です。もう依存はいいやつていうところまで持っていってあげることを含んだ甘えという言葉、この日本語はとてもいい言葉だと思います。

次の図にアタッチメントのタイプ分けが書いてあります。今お話ししましたA型、B型、C型とあって、B型というのがすごくいいのですよね。

具体的にどう測定したか、次のスライドを上げていただいたほうがいいと思います。

我々の感覚から言うと、ひどいことをしているでしょう。こんなことをやって、この三つに分けたんです。ストレンジジャーがいる。初めて会った人がいて、お母さんはいなくなつて、帰ってきたときにどうするか

アタッチメントの3つの形

- A型 回避型
- B型 安定型
- C型 アンビバレント型

んです。何となく昔のドイツ人ってこんなイメージがあつて、私なんかいまだにこんなイメージを持っています。ドイツも今は変化していると思います。アメリカは、B型、日本に次ぐぐらいにはあるけれども、A型も結構多いですね。アンビバレントな人というのはその当時からアメリカでは、ヒラリーが泣いちゃったから大統領には不適格だと言われるぐらい、やっぱりリーダーというのは安定してなきゃがアメリカ流です。で、アンビバレント型というのはこの頃から少なかつたのかもしれない。

回避型というのは、どっちかというと、心の中をのぞいてみて、なぜその人はそんな人を選じたようなことをするのかというのを双方で理解して、安心感のある関係の中で見ていくしかない。ですから、一对一の治療でないとわからないし、直せない。アタッチメントが母親との間で出来ていく。治療関係のようにそれに近いパターンの中で、身につけていくしかない。

それから、アンビバレント型というのは、私はとても人間的だと思います。ワンワン泣いて解離性障害か身体表現性障害ですね、昔はヒステリーとまとめて言っていました。その子たちが入院すると、小児科の先生って真面目なので、これは井原先生だっておまか

用し始めているんじゃないかと。大きく言えば思いますが。こういう背景の中で、今、アタッチメントが問われていると私は考えます。そして、混乱型。つまり、そのものが壊れている。心理学の分野ではなくて、福祉とか政策の領分です。そういう次元の話だと思う。虐待なんかを見ると、みんな貧困と連動していますよね。そういうものとの連動がとも多いんじゃないかと思う。心理学では多分手に負えないだろうって、誰もが気づき始めていると思います。

次は思春期とは何かの定義です。思春期ってほんとうにちょうど分岐点なんです。思春期って、まだ昔のことを振り返ってやり直しができる、だけど、すごい大変ですね。思春期の子どもって、小児科で経験したのは、これ、だめじゃないかというぐらいこちらを困らせるんです、さんざん困らせた挙げ句、よくなるのです、コロッと。ケロッとと言った方がいいです。その辺が醍醐味です。

だから、思春期にうんとヤンチャをやった先生とか、私は実際のヤンチャはやっていないと思うけど、メンタルの中では、心の中では相当なヤンチャをやったので、大体わかります。こいつ、俺がやりたくてやれなかつたことをやっているやつだな。 (笑) お母さんた

的に振るので、全部私がついていましたけど、ワーワー騒いで、でも、騒ぐだけ騒いだら納得して大人しくなるって、とても人間的なものを感じて、私は全くそれと逆のタイプで、どっちかという回避型に近いので、人間的だなと、変に気に入っていた。そういう女性、女性が多かったです。不安がそのまま出てくるような、取り繕わない率直な人たち、今日の皆さんの職場ではモンスターペアレントのように、こういうタイプの人々が増えていくんですね。昔に比べればですが。昔は、だって、10%もいなかった。だから、増えてきて、社会がまだその人たちにどう対応すればいいかというのを理解していないんだと思います。

昔は、回避型はとて少なくて、安定型が多い。だからあまり母子の問題等も前面には出なかつた。折檻としつけはあつた。でも、しつけをする資格のない人がしつけを真似て、立たせて水を浴びせて殺しちゃうのは困ります。偉そうなことやって自分は最悪のことをしてる人たちです。その人たちの受けたしつけというのは何んだらうか、自分の受けたしつけの恨み返しみたいなものを、最も弱い子どもというものにしていくんじゃないか、やくざの世界じゃないですけど、その親がやられたらやり返すという、そういうものが作

育て直しの発達心理学とは

(1) 思春期相談で、子どもの依存や拒否に対して、親身になって助言をすることは、一見何でもない当たり前のことのようにあるが、ちょうど乳児期に、母親がミルクをあげたり、お風呂と一緒に入ってリラックスして楽しんだり、子どもの分離不安をイナイ・イナイ・パーでいやすたり、いわば母親が子どもの心に「おいしいものを作ってあげる」感覚に似ており、相談にのる人は、こうした感覚で接することで、子どもの不安を取りのぞき、子どもを支える人になれることを示している。

ちを見ても、自分がヤンチャをやって、ずっとヤンチャをやっていたら困りますが、それを収めた人のほうが対応は上手です。妙に長引かないで、コロッと転換するコツを知っていることが多かつた。

次です。

これもこのパンフに書いてありますので、ここで安心感というお話が出ましたが、思春期の子どもって、突っ張っているけど、ものすごく弱いんです。次は、ポジティブなものに転換していくということ

育て直しの発達心理学とは

(2)子どもの拒否や攻撃に対して即、反応してしまうのではなく、大人が意味不明の幼児の言葉に耳を傾けたり、その自由な意味不明の行動に付き添ったり、意味がよく分からなくておろおろして思春期の子どもに優越感を与えたりというように、目の前にいる思春期の子どものことを「心配してあげること」自体が治療的な意味を持つことを示している。思春期の子どもはこうした相談者の行動を見て、自分が受け入れられていることを知り、深い安心感を得る。

例えばどろんこ遊びって嫌ですけど、一緒になって、みんな汚れてもいいようなセッティングをしてからやると、すごく楽しく、大人もやる楽しい。親御さんの話が出ましたけど、砂で汚れるのが嫌な親御さんを、子どもと砂場で遊ぶのに一緒に遊ばせたら、「お母さ

育て直しの発達心理学とは

(3)相談を受ける人は、こうして得た信頼をもとに、小さな子どもの質問に答えたり、共にお絵描きのような行動をして子どもっぽさに付き合ったり、例えばキャッチボールをするような感覚で、思春期の子どもの中にある不安をサポートしていくことができる。

これを表では「見立てと道具案内」と表現。

育て直しの発達心理学とは

(4)グチャグチャでまとまりのない子どもの遊びを見守る人のように、こうしたドロドロした行動に対して、その行動の持つ意味を解釈してまとめあげ、

自分でも自分の行動が分からなくなっている子どもの、欠けた部分や言葉にできない部分を「埋めて」あげる。

こうした共感力と表現力が思春期の相談に要求される。そして、一見汚いどろんこ遊びや、グチャグチャのなぐり書き(スクイックル)の中に、いかに大きな創造性が潜んでいるかを見付け、その子の絶望感やコンプレックスをポジティブなものに転換してあげる、そういう感覚とセンスが必要とされるのである。

ん、やめてください」って言いたくなくなるくらい熱中した。事情を聞いたら、そんなことやったことがないお嬢様として育てられた、そういうことがあります。次は、「ミルクとしての解釈」というので、とても印象的だったんですけど、小さいころに正妻さんのとこ

ろに引き取られて、正妻さん子どもが産めなくて、この子と暮らすことになった。憎いでしょうね。この正妻に土間に投げ捨てられて、それがトラウマになったという方でした。私が「しゃべり過ぎですか」って聞いたら、「ううん、ずっとしゃべっててください、先生の言葉はミルクみたいですよ」って言われた。これがすごく印象的だったんです。考えてみると、これが「育て直し」ということを考え始めたキッカケかもしれません。お母さんが言われたのは、4歳のときに気がついたら空が見えて池に飛び込んでいた。多分自殺をした、4歳の子がね。それにこの人自身は気づいてない。こちらが気づいた。多分モンスターペアレントとか、そういう人々というのは、許すとか許さないじゃなくて、多分本人たちは自分がしていることが相手をどう傷つけているかということに気づいていないと思います。それを我々が変に受けとめちゃうから辛くなる。そして、やっぱりいい親になるべきだと我々は頑張っているわけですから、その人を責めてしまっって、結局最悪の事態になり、両方の関係がどんどん壊れてしまっう。そういう関係になると、理解してもらおうということが成り立たない。

ですから、お金を取って、その部屋と時間を決めて

やるというカウンセリングがあるのです。でも、幾らカウンセリングが上手だから、好きだからといって、一日やったらうまくはできない。時間決めてやるというのには、そういう意味がある。両方とも、ある意味、背景を抜きにして語れる時間、できないことを、「ああだこうだ」と言っても楽しくないですよ。でも、二人の間で話す時間が楽しければ、その人にとってよい方向へ変わっていくというの、これも経験的に言えることです。お説教しても意味はない。それよりも話すことってこんなに楽しいんだってということが大事、お母さんが職員との話を楽しく聴く時間を持つことが大切です。

難しいですよ、現場の中では。それは百も承知で、カウンセリングの時間だからできるんでしょう。でも、あまりそういうことを言っても、しょうがない。一時間の時間であっても、楽しい時間を、その人は今までそう言う時間の経験は、きつとなかったのでしょうか、そういう時間を作ってあげた方がいい。種をまくという言い方が聖書にありますけども、皆さんの仕事は種をまく仕事なのだろうなと思います。

保育園の先生方は、自分がやっているすばらしいことに多分気づいていないと思います。日常のことって、炎上したり、名前を出さないでくそみに言うとか、見ているだけでも気持ちが悪くなることを言い合うのがすごく嫌です。匿名性の中でね。やっぱり面と向かって言えることを相手の立場を尊重しながらというのが、私は人間関係のひな形だと思うのです。それを皆さんは作ってくださいって思うように私は思っています。

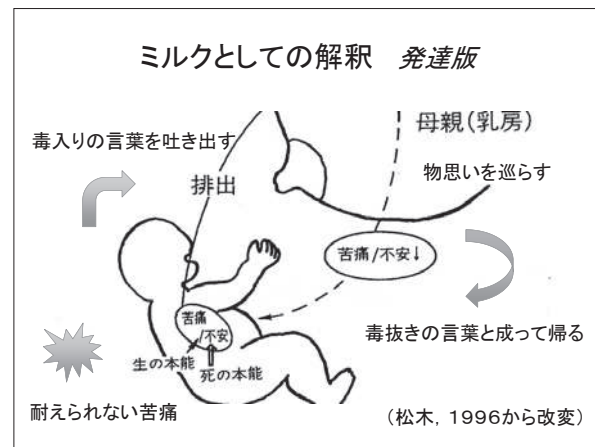
インターネット、私、ここまでやらなかったのは、向かって言えることを相手の立場を尊重しながらというのが、私は人間関係のひな形だと思うのです。それを皆さんは作ってくださいって思うように私は思っています。

次、お風呂にお父さんが入れている。例の遊びの読本で、お父さんが絵になっているのは、やっぱりお父さんにしてほしいという思いを込めて、遊んでいる相手は結構お父さんにしたのです。今では割と当たり前になりました。

中井久夫先生っていう私の尊敬する精神科医が言っていたんですけども、自分にも娘がいる。だけど、性的虐待というのを想像できない。それは自分が精錬潔白な人間であるわけではなくて、小さいころから自分で女

我々は全部忘れてしまっていますけど、それを作っているというのを言いたい。

次の図は母子関係のメンタル面の関係です。



母子の関係をこいうふうにみる。子どもというのは、自分の怒りとか不安を、ぐずったりとか、いろいろな形で母親に出すけど、母親はそれを物思いにふける、思いをめぐらす。

そして、ぐずりの怒りの中にある毒を消して子どもに戻すと。毒消しをして返すという機能がある。こんなこと、完璧には無理です。だから、周りにいる人、一



の子をお風呂に入れていた。そうすると、いつまでたっても女にはならない。自分の女の子だという感覚しかないからだを教えてください。なるほどと思いました。

私にだってありますよ、娘を女性として見る

って。うちの場合は、娘が抱きついてくると、私は逃げて、それで、「お父さん、私のこと嫌いになった？」って、「いや、そういうわけじゃなくて」っていう。「お父さん、恥ずかしがりなんだよ」っていう説明をしていました。それは誰にでもあるんですが、それをもう少し普遍化して話すと、性的虐待をするお父さんと思うでないお父さんの違いはこういうことかなと思います。

次は摂食障害の人の直っていくプロセスで、家族みんなで料理をするようになったということがとても印象的なケースです。

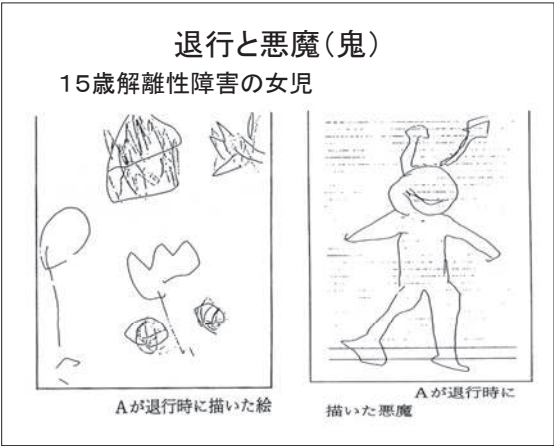
5年生ぐらいでこうやってお母さんが子どもと一緒に、この場合、作る場面があるでしょう？そして大體横で見ているお父さんが人身御供になって(笑)、お父さんに食べさせようってことで、「お父さん泣いてる、よっぽどおいしかったんだね」っていう話になったちやう(笑)。ケースの中でそういうエピソードが起って、家族がもう一回再生していくプロセスを見て考えました。ここには、すごく深い意味がある。その子は中2でした。中2でそういうことをやったということ



とは、大分おくらせています。遅れていると同時に、赤ちゃんだとわがまま放題になるが、中学校になると、そこまで退行しなくても、赤ちゃん返りしなくてもやり直せるんじゃないかなと考えます。

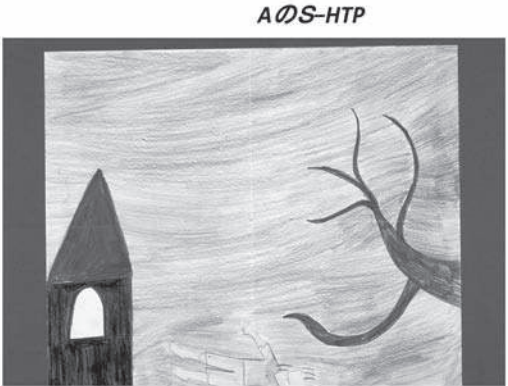
次のケース、高1の子が、こんな幼児みtainな絵を書く子どもにまで戻っちゃう。

三、四歳まで退行して、こんな絵を描く、そして、少し文句を言えるようになったら、悪魔の絵が出てきました。反抗期を表していると思えますが、育て直し、もう一回育て直して、これは同時に親も育て直してあります。ただ、当時私はあまり親のほうは意



識していなかったが、親も実は育て直していたということ、後々考えるようになりました。

次ですが、これは普通だというこという絵を描く子なんです。



普通の絵もよく見ると女の子が下に倒れて、悪魔が住んでいそうな家で、普通じゃないですけど。退行状態、赤ちゃんに戻る、病院でそういうことを診て、人間の心って不思議だなんて

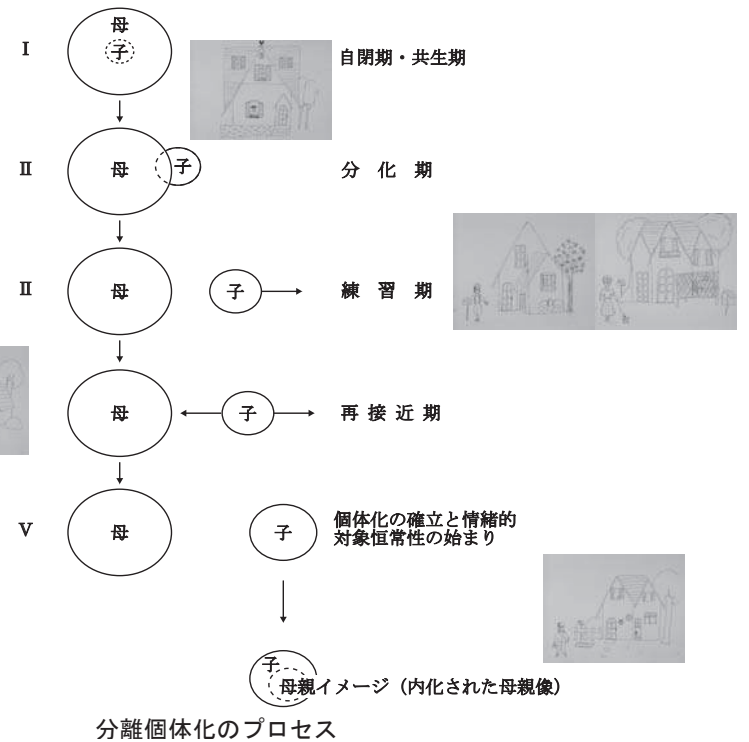
思った。高1の子が三、四歳の子になってしまっ。

時々育て直しというのはすごく批判されて、精神科医の先生なんかで大人になっている女の子と添い寝するとかいう変なことをしている人がいます。私はそうい

うのには最初から違和感を持っていました。幼児期ならば、ある程度、例えば三歳の子が下の子にオムツをさせているから私もさせるというのは、それは一過性のもので健康ですけども、思春期ぐらいがぎりぎりのところですかね。治療という一つ、守られた関係の中でそれをやっていくのがいい。その年齢を過ぎたら、言葉による癒やしや言葉による依存とか甘えとか、そういう世界に変えていかないと、大人になっている人をあたかも幼児のように育て直させる、退行させるなんてもつてのほかです。そういう誤解あるので、いつもこれは注意を促しています。

次は先ほどの分離個体化の図ですが、子どもって、こうやって親から離れて、最終的には自分の中に母親像というのを入れていくことができる。

母親像がいい人というのは、基本的に対人関係の像がいい。厳密には母に限定せず、「母なるもの」と言った方がいい。母その人かどうかは問われなと思いません。



時間オーバーしてすみません。

【前川】ありがとうございます。井原先生の今のお話は、育て直し、壊れた子どもをいかにして育て直すかというのを、井原先生が経験された30年以上の臨床を基にした具体的な話です。ボンディング障害とか愛着形成がうまくいかなくて壊れた子どもをいかに育て直すかという理論です。ケース・バイ・ケースなので、全て同じ子どもはいませんので、そのことを濃縮して話されたのが、今の話です。

もし何か質問がありましたら、また後で質問として上げてください。よろしいですか。

それでは、最後の諏訪先生のお話に移りたいと思います。保育における愛着形成のお話です。先生は、さやま保育サポート会の代表理事で、長年にわたり、この問題について実践してまいりました。このテーマは非常に奥が深いお話ですので、ぜひ先生の話を、いわゆる保育園においていかに愛着形成とか、非認知的な領域を育てるかという問題です。

どうぞ、先生、よろしく願います。

保育における愛着形成

元 明星大学大学院 教授
諏訪 きぬ

ただいまご紹介いただきましたさやま保育サポート会の諏訪でございます。よろしく願います。

私は、さやま保育サポートの会を友人と立ち上げて14年目になりました。実際にやっている事業は、よつばのおうちという定員19名の地域保育所と、子育て広場、4つの学童保育と保育講座の企画運営、それから訪問型家庭支援という、外に出かけられない母親の家庭に向いて支援などを行っています。言うならば子育て支援事業

中心のNPOでございます。その前には明星大学に勤めていましたので、



大学等で研究してきたことも含めて、お話しさせていただきます。レジュメの中にとりどころ誤字脱字もあったりする

かと思いますが、私も年を重ねてまいりましたので、母子健康協会のほうでもチェックをしていただきました。たけれども、もしありましたら、お許しいただきたいと思っております。

グリコといえばゴールインマークが大変有名ですが、この母子健康協会がグリコのつくられたものだという事は全く知りませんでした。グリコといえば、おまけが欲しくて、しょっちゅうおねだりしてグリコキャラメルを買ってらったことを思い出しました。また、私の妹の伴侶である義弟がグリコに勤めておりましたので、新しい製品ができると、時折食べさせてもらってました。けれども母子健康協会が昭和9年につくられ、母と子の健康のために私財を投げ打ってこのような事業を続けてこられたことは初耳です。

その事業の一つであるこのシンポジウムも39回目とか。前川先生はそのうち24回を支えていらしたそうで、このような伝統のあるシンポジウムに、尊敬する先生方と一緒に参加できる場をいただいたことに大変感謝しております。

私の本棚② 前川喜平監修・井原成男著 『親と子の心のカルテ—胎児期から思春期までの臨床心理学—』 新興医学出版社1989	
IV 子どもの発達とイメージ 子どもの発達と絵本 赤ちゃんの大切なもの インテリアと心理的空間	井原成男『ぬいぐるみの心理学—子どもの発達と臨床心理学への招待—』日本小児医事出版1997
	井原成男『子育てカウンセリング「育て直し」の発達心理学』福村出版2008
ハンガリーの乳児保育園での“移行対象”（お気に入りのもの）の扱い方	取り上げはいいけない“物”を無造作に取り上げる保育者たち *なんでこれもってきたん？ けんかになるが・・・お母さん、はよ、持って帰って！！ *保育者の検問をスルーしたTくん お気に入りの“図鑑”で盛り上がり、母の後を追わないで過ごせた

さて私がここで話したいことは三点あります。一つは、私が愛着理論、アタッチメントにどういう形で出会ったかという経緯をお話したいと思っております。その中でその理論的バックボーンとなっていたJ. ボウルビー（1907-1990）への自身の対応についても触れたいと思っております。

随分前になりますが、前川先生と井原先生がお書きになった『親と子のカルテ』という本を読ませていただいたいて、移行対象という言葉を知りました。子どもたちが園に大事そうに抱えてくるぬいぐるみとか、タオルや毛布。かなり汚くなっているものもありますから、園の先生方は子どもたちが取りつこしたり、それにこだわると面倒だということで、さっと取り上げて親に渡したり、「はいはい、これね、先生、しまっておくから」と隠したりしますね。その行為をどう思われますか？ さらに井原先生の『ぬいぐるみの心理学』を手にして、それら子どもの「お気に入り」のものが、子どもの心の拠り所として子どもにとっても大事なものだとなりました。それ以来、私は井原先生の隠れファンなのです。従いましてこのような機会を与えていただいたことを大変うれしく思っております。

二つ目にお話するのは、保育の中での愛着形成についてです。そこが今日のお話の中心点であります。その中で、乳児保育（0歳児保育）がなぜ否定されつつ拡大したかという経緯についても話したいと思っております。

そして三番目は、まとめですが、これからこんな保育を皆さんがづくり出してくださいという希望や期待を、実践事例を通して述べさせていただきます。終わりにしたいと思います。

1. 愛着理論との遭遇

残念なことに、私はJ. ボウルビー（1907-1990）を毛嫌いするところから始まり、徐々にその理論をバックボーンに保育実践現場とかかわるようになって行きました。といいますのも、その当時私は、長男を出産して間もない新米ママで、「子育ても仕事もしたい」と思い詰めていたからでした。ボウルビーを読むと自分が責められているように思い、あえてボウルビーに目をふさいでいたのです。

私は長男を生後6カ月から、長女を43日目の産休明けから無認可保育園に預けてずっと共働きの生活を送ってきました。今は産後休暇や育児休暇がありますが、

長女出産時国家公務員だった私には、6週間の産後休暇がありませんでした。5年も前のことではありませんが…。

1. 3歳までは母の手でー

あなたは「3歳児神話」を信じていますか？

ここにはかなりキャリアを積んだ先生方もいらっしゃるかと思うのですが、お子さんを保育園に預けて働き続けてきた方、手を挙げてみてください。たくさんいらっしゃると思いますね。その際「3歳までは母の手で」という3歳児神話について、皆さんはどう思われましたか。今までに出会った保育園の先生の中には「他人の子は預かるけど、自分の子は預けない！」と言い切る先生方がたくさんいらっしゃいました。共働きの親の子どもたちは、長時間・長期間保育園で育つわけですから、この3歳児神話は、母親にとっても、預かる側の先生にとっても、かなり重い問題として存在するように思います。

下の表は「3歳までは母の手で」に関して、「預ける側の母親の思い」と「預かる側の保育者の思い」をまとめたものです。青い字の部分は50年前、私が32歳ぐらいのときに友人と本を出すに当たって、子ども

「3歳までは母の手で」

ーあなたは3歳児神話を信じてますか！？ー

預ける側の思い(親)

- *50年前も今も変わらない
- ・頑是ないものを他人さまに預けるなんて！
- ・鬼のような親！身勝手な親！
- ・「預けてる」なんて言えない！
- ・「問題親」=母性を喪失している

- ・育児休暇はいつまで取るか？
- ・何歳から預けるのがいいの？
- ・0歳でしか入れない。早く預けて大丈夫かしら？
- ・「3歳までは母の手で」というものね。やはり仕事はやめたほうが…

預かる側の思い(保育者)

- *保育界の根強い乳児保育否定
- ・大学を出た母親は非常識。
- ・預かるのは、一人歩きが出来る、おむつがはずれたら…
- ・親の愛情に勝るものはない。
- ・母親を後追いする子を見ているとかわいそうな気がする。
- ・子どもを見るのが嫌だから仕事しているのでは…？
- ・他所の子は保育するけど、自分の子どもは預けない！

を園に預けた方々にインタビューをしたときのもの。その下の黒字の部分は現代のもので、50年前と現在とそんには変わっていないです。

私は大学院生であっ

た。とにかく自分の希望を実現するためには、この子をどこかに「預けなければ」やっていけないと思えました。それで、友人たちにもいろいろ助けてもらって、やっと見つけたのが、無認可共同保育所でした。

そこは女子高の先生たちが集まって作った6畳一間の小さな保育所で、学校の近くに住む先生が自宅の一室を保育室として提供してくださっていました。私は、ためらいながらもそこに6か月の息子をお願いすることにしました。そこから私は「3歳までは母の手で」バッシングに直面することになりました。その第1号は姑でした。「この頑是ないものを他人様に預けるなんて！」という言い回しで、私の胸を射抜きました。

第2号は兄嫁で、私に面と向かっては言わずに、私の坊やをあやしなから「こんなにかわいい子が他所に預けられているのねえ」と聞こえるように言うのです。そして第3号は私の実母で、私の代わりに保育所に迎えに行ってもらうと「保育所から連れ帰ると保育所の匂いがある！」「早速お風呂に入れて可愛いTちゃんにしないで…」とズケズケ言って私の感情を逆なでするわけですね。身内のバッシングはお世話になるので反論も出来ず、結構きついものがありました。

また、夕方にかけて発熱した子を小児科に連れていくと、「昼間はどんな状況でしたか？ とか便はどんな匂いだったか？ どんな形状だったか？ とあれこれ聞かれるわけですが、悲しいことにちゃんと答えられません。でも、「この子を保育所に預けている」とは、先生の前でなかなか言えない自分がいました。バッシングされるのが怖くて…。

ですから、子どもを保育所に預けることによって、世間が狭くなるというか、私を批判的に見る人が増えてくるというか、何となく肩身の狭い感じがいたしました。この表の中にも「鬼のような親と言われた」とか、「大学出の母親は非常識！って言われた」とか、座談会の中でお母さんたちはぼろぼろ泣いて、辛い心情を語ってくれました。そして今も、お母さんたちは、わが子を預けようと思ったときに、ものすごく揺れているのではないかと思えます。「3歳児神話」が強く残る日本の場合、働き続けることを選択するお母さんは3割くらいにとどまっております。そういう意味で、「3歳までは母の手で」という3歳児神話は、昔も今も女性たちに大きな影響を与えており、足枷にもなっています。

そこに「保育者の育児意識の日韓比較」を挙げてお

家庭保育第一主義の根拠

「母性的養育の剥奪」を説くJ. ボウルビイ(John Bowlby)って！？

<p>ジョン・ボウルビイ(1907-1990)</p> <ul style="list-style-type: none"> イギリス出身の医学者、精神科医、精神分析家。専門は精神分析学、児童精神医学。精神医学に動物行動学的視点を取り入れ、愛着理論をはじめとする早期母子関係理論を提唱した。 1933年 医師資格を取得。モーズレイ病院で成人精神医学を学ぶ 1936年 ロンドン児童相談所 1937年 精神分析家資格取得。 初期はメラニー・クライン、後年はアンナ・フロイトに師事する 1940年 軍医として勤務 1945年頃 タビストック・クリニック副所長 1950年 世界保健機関(WHO) 精神保健コンサルタント 	<p>J. ボウルビイ著・黒田実郎訳 『乳幼児の精神衛生』 1967</p> <ul style="list-style-type: none"> * 第1部 母性的養育の喪失による不幸な結果 * 第2部 母性的養育の喪失の防止 * 1950年代第二次世界大戦後のイタリアで孤児院、乳児院などに収容された戦災孤児の発達、身長、体重の増加、罹病率、死亡率、適応不良などが問題になり、施設病ではと疑われたとき、その調査(西欧・米国)に携わる。 * 1951年母親による世話と幼児の心的な健康の関連性についての論文「MATERNAL CARE AND MENTAL HEALTH」を発表。 * その中で新生児が自分の最も親しい人を奪われ、また新しい環境に移され、その環境が不十分で不安定な場合に起きる発達の遅れや病気に対する抵抗力や免疫の低下、精神的な問題などを総称して「母性的養育の剥奪」(deprivation of maternal care)と定式化。 * 後にこの概念は世界保健機関による親を失った子どもたちのための福祉プログラムの根幹となった。(出典: フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』)
--	--

きました。韓国の保育者っておもしろいのですが、「母親にはとてもかなわない」と思いつつ、でも、「3歳児神話はそれほど信じていない」というか、「預かって大丈夫」と思っている。日本の保育者よりプロ意識が強いような感じもしますね。しかし韓国でも「3歳までは母の手で」という意識は高学歴の女性を含めて高く、特に専業主婦の道を選んで子どもを幼稚園に入れた女性は、その思いが非常に強いのです。ですから、保育園に預けて働こうとしている母親たちに、同じ母親でも対立し合うような関係が生まれてくるわけです。そのようなとき、預かる側の先生方がどういう態度をとるかで、預ける側に立った母親は救われたり傷つけられたりすることになるわけです。

私が預け始めたときに、バーンともろにぶつけられたのが「保育7原則」でした。ここをご覧ください。

第1から第7までの原則のうち、「両親による愛情に満ちた家庭保育」、「母親の保育責任と父親の協力義務」、「保育方法の選択の自由と、子どもの、母親に保育される権利」等々第6原則まで「家庭で育てるのが一番」という家庭第一主義で貫かれていました。第7原則になって、やっと集団保育というのが出てくるのですね。こういう時期に私は母親になりましたから、バッシングがある

立ちふさがる保育7原則

- 第1原則 両親による愛情に満ちた家庭保育
- 第2原則 母親の保育責任と父親の協力義務
- 第3原則 保育方法の選択の自由と、子どもの、母親に保育される権利
- 第4原則 家庭保育を守るための公的援助
- 第5原則 家庭以外の保育の家庭化
- 第6原則 年齢に応じた処遇
- 第7原則 集団保育

(1963「保育問題をこう考える」中央児童福祉審議会保育制度特別部会中間報告)

家庭保育第一主義がまかい通る

とても当然で、大変な時代だったのです。

この家庭第一主義がどこから来ているかを調べたら、そのバックボーンをなしていたのがジョン・ボウルビイさんだったのです。井原先生が先ほど、戦争とアタッチメント研究は非常に深く結びついている、悲しい理論だとおっしゃいましたが、J. ボウルビイは、世

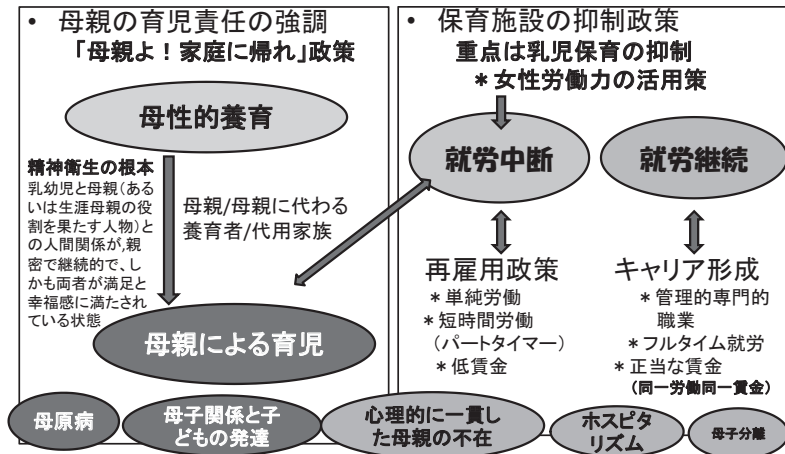
界保健機構(WHO)から委託されて、第二次世界大戦の中で親を失い、施設で育てられている子どもがどういう影響を受けているかを明らかにするため、膨大な研究データを集めて分析し、「母性的養育の剥奪」について理論化したのでした。

それによれば、「どんなに滋味豊かな栄養を与えても、あるものが欠けると絶対に子どもはまともに育たない」、「それが基本的な精神衛生なのだ」ということなのですが、その子どもにとって基本的な精神衛生になるのが「母性的養育」いうことなのです。

母性的養育とは何かといいますと、乳幼児と母親(あるいは生涯母親の役割を果たす人物)との人間関係が、親密で継続的で、しかも両者が満足と幸福感に満たされている状態。これが基本的な精神衛生だというわけです。「親密で継続的で、しかも両者が満足と幸福感に満たされている状態」を創出し続けるのは難しいですね。その子のためを思って本気で手を尽くそうとする人がいない限り、心を尽くし慈しみたいと思う人がいない限り、これは成り立たない。これだけ虐待が増え続けている時代ですから、これがどんなにか難しい課題か、お分かりになるとと思います。

当時、私は、基本的には「母性的養育」の必要性に

J. ボウルビイ 「母性的養育の剥奪」論の影響



(土方弘子・諏訪きぬ・柴田悦子『働く母の保育論』 汐文社1973)

心の中では同意しながらも、そうしたら自分が負けてしまう、共働きを続けるためにもっと突っ張っていかなきゃいけない!というふうに思っていました。苦しい思いをしていた私は、何かいいことを書いている先生はいないかなと思って探して探して探して、小嶋謙四郎先生の『母子関係と子どもの性格』という著書でした。先ほど井原先生が小嶋謙四郎先生の仮説をお出しになられたましたが、同じ先生です。私は「早い時期に母子関係が希薄であれば子どもの性格が歪む」という説に怯え、二つの非行の卵を抱えているみたいなの恐れもあってその本を手にしたのでした。今もその本は本棚にあります。

「モノトロピー」と言いますが、その当時は、「唯一絶対特定の一人の人の愛着形成」から始まるというものでした。私は子どもが「同時に二人とか三人の人を好きになる」という説はないのかしら? と新しい理論を求めていました。家で見ている、子どもは多様な人に懐きます。母親はいの一番に好きだけれど、父親にも、実家の母にも、それから嫁ぎ先のおばあちゃん、おじいちゃんにもなついている。だから、そういう理論があってもいいのではないか。親も大好きだけれど保育所の先生も大好き!というふうになれば、3

歳児神話に苦しめられずうんと楽になれる!と思いましたが。現在では「ダブルアタッチメント論」とか「ネットワークのアタッチメント論」等に発展していると思いますが、それらを探し求めて小嶋先生の本を繰り返し読みました。しかしそこにはスパッとした答えは書いてありませんでした。が心に強く残ったことは、「アタッチメントが子どもの自立のためにものすごく大事なものだ」ということ、それから、「子どもが保育園、幼稚園に入ること人間関係がぐっと広がる、園は子どもにとって貴重な場である」と強調されていること、さらに「乳児に与える効果についてはこれといった目ぼしい研究は行われていない」と断言されていたこと、でした。小嶋先生が乳児保育の現状を非常に客観的に示されていたので、私はかなり救われた感じもしました。その先生が井原先生の指導教官・ゼミの先生だったので、ほんとうに奇縁といえますか、ご縁をいただいていると思います。

2 働く母親の増加と乳児保育政策

1960年代から70年代にかけて、日本の経済は高度成長期を迎え、中卒労働力不足を補うものとして、女性の労働力活用策が展開されていきました。現在、

女性の労働力確保と保育所政策はセットになっていますね。赤ちゃんから、あるいは1歳から保育園に預けて働きたいという母親の要求に応えようと、安倍政権も待機児童解消に一生懸命になっていますね。ですから東京都23区の場合、すごい勢いで保育園が増えています。

しかし当時の政財界の女性労働力政策は再雇用政策でした。キャリアを積んで働き続ける女性像ではなく、結婚して子どもをもてば女性は退職する、子育てが一段落した主婦を再雇用して安上がりに使うというのが、わが国の基本的な女性労働力政策でした。

ここでみなさん、この女性労働力政策と3歳児神話がうまくリンクしているとお思いになりませんか? 世の母親たちは、ボウルビイの「母性的養育剥奪論」の影響を受け、母親の育児責任を果たすために仕事をやめたほうがいいと思ひ、また思わせられて退職する。そして政財界は「手がすいたら再就職しよう!」と誘い出すわけですね。しかしいざ再就職しようと思つと、以前やっていた仕事には就けず、こうしたご時勢の中で、「就労を継続するために乳児保育を求める」ということは大変なことだったわけです。しかし働き続けたいと願う母親たちは「職場保育所」「無認可

共同保育所」つくり運動に取り組み、自治体の保育責任を求めて「公立保育園設置運動」を展開していきました。その動向に対して国は、1968年「小規模保育所の設置認可について」、1969年「保育所における乳児保育の強化について」（厚生省）、同年「保育所における乳児保育対策」（中央児童福祉審議会）等、一定の乳児保育対策を講じます。しかし乳児保育を低所得者層に限定し、産休明けからの受託を否定するなど女性の職業継続に資するものとはほど遠いものでした。

しかし時代は徐々に動いていくものです。私が25歳で母親になり、私の子どもたちが成人するまでのこの20数年の間に、日本だけではなく国際的な取り組みとして「男女のあり方」についての論議が巻き起こりました。1975年の「国際婦人年」を皮切りに、「男女の性的役割分業」を見直す大きな国際的な潮流が引き起こされていきました。「国際婦人10年」は10年をかけて男女の役割を見直そうという取り組みでしたが、その間に「女子差別撤廃条約」に合わせて、それぞれの国が国内法の見直しを行いました。わが国でも「男女雇用機会均等法」「育児休業法」「男女共同参画社会基本法」などなど、男女の位置や役割を「対等性」をべ

こうした大きな潮流の中で、1990年に25年ぶりに「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」の改訂を迎えました。その際、わが国にはまだ「育児休業法」が成立していなかったため、男女が平等に働き続けるための手段として、産休明けからの乳児保育を制度化しなければ国際的に立ち行かなくなりました。そんな事情が反映して「保育所保育指針」の中に乳児保育（第3章6か月未満児の保育の内容）がきちんと位置づけられ、子どもと大人の関係を重視する保育の方針が打ち出されました。その後貧しい家庭の子どもだけに限定していた乳児保育を一般化し、どの階層のお子さんでも乳児から預けていいという方針が出されます。それはなんと1998年になってからのことで、まだ20年ほど前のことに過ぎません。

このような経緯を経て、次第に乳児保育、3歳未満児保育を利用して働き続けようとする母親たちが増えてきています。こうした社会的な支援体制をとらない限り、母親は家事・育児のために仕事を辞めざるを得ないからです。毎年「保育所落ちた！」と社会現象となっている待機児問題も、主に3歳未満児保育の枠をめぐって生じているのです。

3歳未満児の年齢別入所児童数の推移を1990年

「ス」に「男性も女性も仕事と家事育児をする」とする理念が提唱され、実際的な取り組みが世界中で展開されていきました。

「職業と家庭の両立支援策」と乳児保育

愛着理論を基底に乳児保育を位置づけ	職業と家庭の両立支援策
<p><全ての保育所で乳児保育が出来る></p> <ul style="list-style-type: none"> * 1965 「保育所保育指針」作成（厚生省）・・・3歳未満児への対応は不十分 * 1990 「指針」25年ぶりに改訂 ・乳児保育年齢区分の見直し <ul style="list-style-type: none"> 第3章 6か月未満児の保育の内容 ・保育者と子どもの関係の重視 <ul style="list-style-type: none"> * 第2章 子どもの発達 1. 子どもと大人との関係人への信頼感と自己の主体性の形成は「愛情豊かで思慮深い大人の保護・世話などの活動を通じた大人と子どもの相互関係の中で増われる」 * 第3章 2. 保育士の姿勢と関わりの視点 「特定の保育士の愛情深い関わりが、基本的な信頼関係の形成に重要であることを認識して、組織制を取り入れるなど職員の協力体制を工夫して保育する」 * 1998 乳児保育の一般化 	<p><枠組み構築の過程> *</p> <p>1975 1989国際婦人年 “国連婦人の10年”</p> <ul style="list-style-type: none"> * 1979女子差別撤廃条約 * 1985男女雇用機会均等法 * 1991育児休業法 * 1989～ 少子化対策 “エンゼルプラン” 子育て支援策 * 1999男女共同参画社会基本法 <p>性別役割分業観の排除</p>

「家庭生活と職業生活の両立」と社会的サポート



男女の性別役割分業の見直し

男女共同参画基本法(1999・6)

第3条: 男女共同参画社会の形成は、男女の個人としての尊厳が重んぜられること、男女が性別による差別的取扱いを受けないこと、男女が個人として能力を発揮する機会が確保されることその他の男女の人権が尊重されることを旨として、行われなければならない

第6条: 家族を構成する男女が、相互の協力と社会の支援の下に、子の養育、家族の介護その他の家庭生活における活動について家族の一員としての役割を円滑に果たし、かつ、当該活動以外の活動ができるようにすること

を100とした指標で見えますと、2011年の時点でもっとも増加率の高いのが1歳児で245.9、次に0歳児の212.1、そして2歳児の183.1となっております。「育休ができれば0歳児保育は減る」と言われていましたが、0歳児、乳児保育もこの間に2倍以上になっています。そして一年間の育休休暇取得のあと職場復帰する母親にとって、1歳児を保育所に入れるのは至難となっており、ここにもっとも鋭く待機児問題が集約されています。

新しいデータでは、2018（平成30）年の年齢区分別利用児童数（保育所・幼稚園型認定こども園等、地域型保育事業等を含む）は、総数2,614,405人（100%）、その内訳は低年齢児（0〜2歳）が1,071,261人で41.0%を占め、うち0歳児は149,948人（5.7%）、1・2歳児は921,313人（35.2%）となっております。「3歳までは母の手で」といわれる0〜2歳児が、100万人以上も朝になると親に連れられて園に通い、親が仕事を終えて迎えに来るまで、長い時間を園で過ごしているわけですね。

私は子を託す母の立場からもまた保育研究者としても、長時間・長時間保育を受ける子どもたちの生活のあり方、保育の質を問わずにいらなくなつて、そこから「保育の中の愛着形成」を研究テーマにするようになりました。

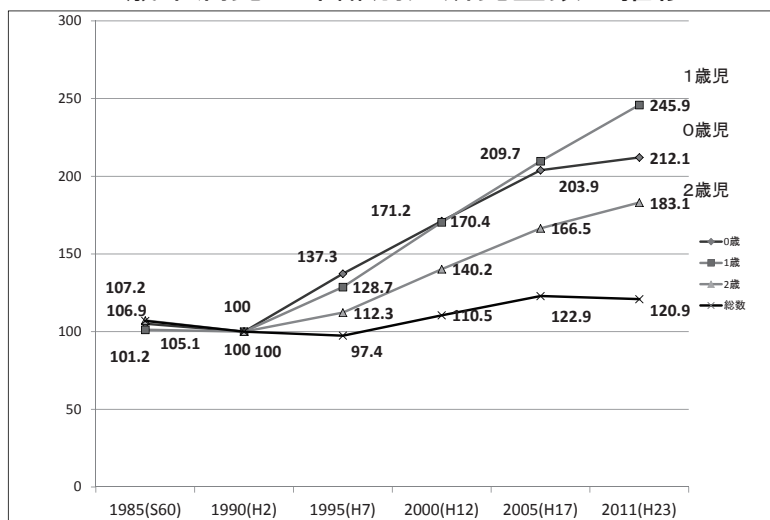
2. 「保育における愛着形成」の研究と実践

ここから「愛着理論を保育の場へ」という取り組みについてお話しますが、これもなかなか難しいことですね。まず、現場が忙し過ぎます。乳児保育の基準が保育者1人に子ども3人ですね。保育者は母親の3倍仕事をしなきゃならないわけですが、3人を抱きかかえてもいられないですね。ですから、保育者と子どもとの間に愛着形成を！と提唱しても、「なに夢のようなことを言っているの!？」と怒られそうですよね。

この乳児の写真をよくご覧ください。この子たち笑っているように見えますが、みんな泣いています。日本の



3歳未満児の年齢別入所児童数の推移



原訪きぬ「子育てと仕事の両立支援と保育」(日本保育学会『保育学講座⑤保育を支えるネットワーク』東京大学出版会2016所収)

子どもさんを出すと支障がありますので、外国のお子さん借りてきましたが、助けを求めるように泣いていますね。園で子どもたちがこういう状態で放置されているとしたらどうでしょうか。家庭でも親にネグレクトされたら、こういう状態になりますね。子どもへの不適切な取り扱いを「マルトリートメント」と言いますが、それは家庭でもあり得るし、園でもあり得ます。虐待も、家庭でも起こり得るし、園の中でも然ります。それらは力のある大人とか弱い乳児・幼児との関係の中で生じてくることです。

殊に赤ちゃん、0歳児は何も言えない。「こうされたよ」って言いつけることもできない。そういう幼子を園に預ける母親たちは内心すごく心配しているけれども、保育の実際を知るすべはなかなかありません。保育中の映像を配信している園もあるようですが、多くの場合手がかりとなるのが連絡帳ですね。「機嫌よくやっております」「書いてあったら、「ああ、よかったです。機嫌よく元気に過ごせて」と思うしかないわけですね。ですから社会的に組織されている保育の場は、出来る限り子どもの気持ちに寄り添い、優しくあるように、スタッフ全員が気心を合わせていく責務があると思うのです。

論文① 保育の指導過程に関する一考察
—保育者と子どものかかわりをめぐって—1982

表2 1歳児クラスの食事の世話・指導の内容

世話・指導	園名		
	A園 子ども3人と 保育者A	B園 子ども5人と 保育者B・D	C園 子ども5人と 保育者C・E
①配膳・おかわり等の世話	18	13	14
②-1食べさせる	7	4	20
②-2手を添える(切り分け)	13	2	9
②-3言葉で促す	11	9	36
③食べ方の指導	3	2	3
④子どもの求めに応ずる	15	6	20
⑤エプロンの着脱・口拭き	8	3	10
⑥その他	1	2	7
	76	41	119

(注) 数字はかかわりの回数
かかわりの1人平均
かかわりの最多の子

25回 8回 24回
あやこ46回 ちか 15回 なつこ39回

保育条件がいいか悪いかだけで、保育者たちの保育姿勢が決まるものではない！これは私が無認可共同保育所でも出会った保育者の方々から実感したことです。実に親切で前向きで温かい先生たちでした。組合の要求で賃金引き上げをし、配置基準をよくしても保育がよくならないと言えない。これもよく見聞きしてきた事実です。しかしいい保育条件であればいい保育をし

て欲しい。
こんなことを研究課題としてどう取り組んだらいいか、思案している最中に好機が訪れました。1980年に行政改革という取り組みが開始されて、国基準を上回っている自治体の基準を見直す動きが出てきました。例えば保育者の受け持ち人数ですが、1歳児の場合、国は1対6でしたが、都基準は1対5。自治体によつては1対4というところもありました。当時一人先生を雇うと三百万くらいかかる時代でした。ですから、配置基準をちよつと変えるということだけでも、自治体にとつては大きな財政的負担を負うことになりました。その自治体や組合の努力を維持するためには、基準改訂がどのようないい保育を生み出しているか、その良さを明確にする必要があると考えました。国基準に戻せという政財界からの行革の嵐の中で、私

のささやかなデータ収集が始まりました。実習園訪問とか知り合いの園の見学とか、とにかく園訪問する機会をとらえて、1歳児の食事場面の観察記録を取りました。食事の場面に着目したのは、子どもが動かないので、初めてのクラスでも記録しやすいと考えたからです。一つのテーブルについている先生とその周りについている子どもたちがどんなかかわりをつつ食事をするか、そこには生活文化のあり方や「保育者と子ども」のかかわり方・頻度などを通して、なんらかの質が捉えられるように思いました。当時はビデオが普及していなかったので、テープレコーダーを持参して音声記録し、他は筆記記録によるデータ収集でした。

それらの園から保育条件が都基準よりよい条件の下で食事をしてきた3園のデータを起し、「保育の指導過程に関する一考察」という論文にまとめてみました。一つのテーブルにいる子どもたちに保育者がどうかかわったかをカテゴライズし、かかわりの頻度を出しました。その結果は、A園は平均25回、B園は8回、C園は24回と、園によつてかかわりの頻度が大きく違うことが見えてきました。また、そのかかわりの中身も、カテゴライズした項目にそつて分類していきますと、大きな違いが見られました。

こうした研究が保育現場で理解され、保育の見直しに活用されたら・・・との思いで、知り合いの園長先生たちに、論文の抜き刷りを配りました。そうしたら、「諏訪さん、こういう研究って現場に役立つじゃないの！」と言ってくれる園長先生が出てきました。40歳の頃でしたから嬉しかったですね。その冊子は増刷に次ぐ増刷で、5,000部ぐらいは出たかと思えます。現場に役立つ研究ってこういうものなのかと実感し、初めてヒットを打ったような打者のような感じになりました。それ以降は現場に入って研究データを取り、それを基に実践を振り返り実践を変えていく・・・研究と実践をリンクさせた形でやらせてもらってききました。

その次に共同研究で着手したのが、1歳児の入園に伴う分離不安のデータ収集です。その頃にはビデオも入手でき、研究チームもありましたから、分離不安の研究に取り組むことにし、4月の入園の状況を静岡と東京でデータ収集することにしました。

先ほど井原先生や前川先生がおっしゃいましたように、身近な大人に対してアタッチメントが形成されているのが1歳くらいです。したがって1歳児入園は母子

資料3 新入園児の受け入れの体制

新入園児の泣きと保育者のかかわり

「ならし」保育	K.M.児の場合 (静岡・O保育園)						M.S.児の場合 (東京・T保育園)							
	入室	5	10	15	20	25	30	入室	5	10	15	20	25	30
第1日目			H①→		H①→		母	母		H①→		脱カード 靴を見せる	(ワラス) おを見せる	くさり ナップ
第2日目	母	H①H①	H①					祖父 兄	H①			脱カード 靴を見せる	くさり ナップ	
第3日目	母	H①		H①				病 欠						
第4日目	母	H①	H①					祖父 兄	H①		Bブロック	洗面器	ナップ	ワイプの 拭きやつ
第5日目	母	H①H①			H①	H①		母	H①		Bブロック	洗面器	ナップ	くさり 拭きやつ
第6日目	母	H①H①			H①	H①		祖父 兄	H①		Bブロック	洗面器	ナップ	くさり 拭きやつ
第7日目								祖父	H①		Bブロック	洗面器	ナップ	くさり 拭きやつ

↑ 静岡O園のデータ

↑ ききょう保育園のデータ

(金田利子・柴田幸一との共同研究「1歳児の“なれ”の過程」のデータ収集と分析)

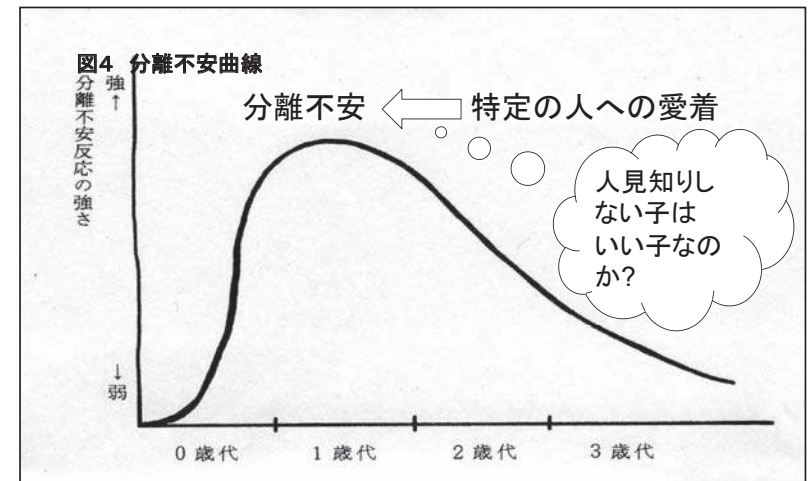
分離不安がもつとも高い時期ということになります。母親にアタッチメントを形成したのに、母親が職場復帰していく。子どもにとっては、親と別れるのはパニックですね。これを分離不安曲線といいますが、不安曲線は1歳台でピークに達し、2歳ぐらいいまですと続きます。ですから1歳児保育は子どもにとってはとても過酷なことなのです。

資料3「新入園児の受け入れの体制」は1歳児4月入園当初の新入園児の泣きと保育所のかかわりを記録したものです。1歳児クラスの場合、ほとんどの子は0歳児クラスから進級してきますので、新入園児の方が数少ないのは分離不安の強い1歳児の保育としては望ましいと思われる。分離不安を抱えた1歳児が、家族との別れに際してどのように泣いて不安を示すか、それをどんな体制で受けとめ保育するかをビデオに収めました。園によっては、最初の1週間だけは特別な保育シフトを敷いて、毎朝決まった先生が受け入れるようにする園もありました。その一つがききょう保育園です。Mちゃんは初日、すごく泣きましたが、比較的早く泣きがおさまっていききました。同じ先生が受入れている泣きが続くと続く子もいますが単に保育体制だけではないと思えますが、不馴れな子どもが

この先生のそばにいればよいと心のよりどころが見つけやすい保育というのは、安定感があつていいなと思いました。ここから私たちは、担当制保育や持ち上がり担任制にも関心を払うようになっていきました。保育現場に入れていただいて、直にデータを集め分析する面白さに目覚めて、それ以来10年ほど共同研究を続けました。その共同研究をまとめたのが『母子関係と集団保育—心理的拠点形成のために—』という本です。この題名には母子関係理論を集団保育の場組み入れたという思いが込められています。その中にはビデオ分析で「どのように保育者と子どもが関係を結び、子どもの気持ち満たされていくか」を丹念に追ったものも取られています。例えば保育者が子どもを長い時間抱いていると、いかにも子どもの思いに込んでいるように見えますが、子どもを抱きあげるときの判断を間違えると、子どもは抱かれたくもなかったのに抱かれていたわけですからいつまでも気持ち満たされません。30分も抱っこしているのに保育者が安全基地になつていないのです。逆に、すごくうまくいく事例もあるわけです。保育者と子どもの関係性を分析し出すと、いろいろな発見があつてわくわくするほど楽しいのです。このような経験を通して、私たち

分離不安と不可欠な保育者との愛着の形成

0歳児後半から2歳くらいまでの強い分離不安



(柴田幸一「母子分離不安と3歳未満児保育」『母子関係と集団保育』明治図書1990所収 P.27)

保育の中での保育者の継続性

・ 保育の落ち着きを生む担当制保育

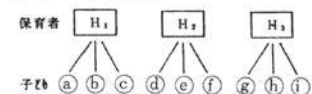
① 保育体制（担当制の有無）

グループ担当継続制（イ）は、特定の子どものグループを特定の保育者が継続的に保育することにより、保育者と子どもたちの濃密なかかわりを保障しようとする保育体制であるが、それを実施している園は、88園（37.4%）にのぼっている。

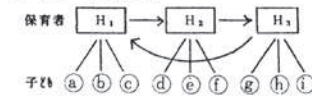
・グループ担当交代制（ロ）は、26園（11.1%）、

・複数の担任で適宜に保育（ハ）は127園（54.0%）で、3歳未満児保育の主流は、3歳未満児保育がかなり普及した今日においても、

イ. グループ担当継続制



ロ. グループ担当交代制



ハ. 複数の担任で適宜に保育

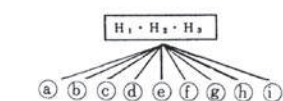


図6 イ グループ担当継続制
ロ グループ担当交代制
ハ 複数の担任で適宜に保育

（金田他『母子関係と集団保育』明治図書1990p.180）

「担当制」という言葉を使っていらいっしやいますか。この図のように、例えば1歳児15人のクラスでしたら、保育者が4〜5人はいますね。担当制というのはH先生がAちゃん、Bちゃん、Cちゃん・・・に主としてかわる、K先生はG・H・Iちゃん・・・にかかわるといふ風に、特定の先生が特定の子どもの保育を主に担当するのが担当制保育です。そんな保育をやっていらいっしやるところありますか？ わずかですけれどありますね。うれしいことです。他に保育者のくせがつくからくるくの変えるというやり方（グループ担当交代制）の園もあれば、どうせあれこれ決めたって、シフトや何かで決まった保育者が決まった子のところに行けないから、適当にやればいいのかというところで、複数の担任で適宜に保育するという保育もありますね。

次は実際に小川晶さんが最近お取りになった担当制のデータをお借りしておりますが、担当制をとって保育している公立園ですが、高年齢出産で双生児をもうけた母親を支え続けた実践事例です。パニックに陥った母親を決まった保育者が支え続けていくのは相当きついです。先生が固定しているからこそ、責任をもって立ち向かっていけるといふよさもあります。

研究書『母子関係と集団保育

—心理的拠点形成のために—の出版明治図書1990

* 構成と概要

1. 母子関係論と集団保育

母子関係論の歴史の変遷を押さえ、3歳未満児保育の重大な課題である母子分離不安に着目。

2. 集団保育における保育者と子どもの関係

生活・遊び・散歩（課業）などの活動における保育者と子どものかかわりのあり方を探究。



3. 新入園児の受け入れ（ならし保育）に関する調査

新入園児受け入れの望ましいあり方、3歳未満児の望ましい保育体制や保育者の愛着理論を中心とする育児意識等の分析を行い、集団保育における心理的拠点形成の方向を探究。

* 1986年から、「集団保育における心理的拠点形成に関する研究」に金田利子・柴田幸一・諏訪きぬ等が共同で取り組む。

* 研究目的は「橋関係理論を歴史的に検討」するとともに、「保育者と子どもの関係の望ましいあり方を明らかにし、3歳未満児保育の方法の体系化を図る」こと。

は、保育の実践をベースにして、よりよい保育の方法を導き出したいと願うようになっていきました。

この著書は第I部が母子関係と集団保育で、母子分離不安と3歳未満児保育のあり方について問題提起しています。第II部は集団保育における保育者と子どもの関係で、「A. 子どもの要求と保育者の意図のズレ」をめぐる、「B. 遊び・生活・課業的活動場面における保育者と子どもの関係」「C. 集団内行動の発達に関する研究」を収録しています。そして第III部には「新入園児の受け入れ（ならし保育）」に関する調査」を収めました。

前川先生や井原先生が臨床を通して、「母子関係の壊れた事例からそれをどう回復するか」を丹念に事例の集積をされ方法化されているように、私たちの研究もまた、園の中で集めた事例の中から、こうすればいい保育になるのでは・・・という実践事例を集積して、そこから適切な保育方法を編み出す、そのことよって保育者と子どもの関係をより安定した「母子関係の関係」にしたい、そんな思いを抱いた研究者たちの共同研究でした。

ここから次の研究テーマへと発展して行くのですが、私達が第III部のアンケート調査の中で見つけたのは、受

③ 担当制と持ち上がり制

・ 0歳児クラスの担当制

表1. 0歳児およびこどもの子どもと担任の状況(平成3年度)

氏名	発 生 日	入園月	年 齢	担当保育	経験年数
1 中村 基子	1975.2.2	4月	10か月	大口	2年
2 大石 南	1975.7.18	4月	6か月	大口	2年
3 小林 杏あり	1975.5.21	4月	7か月	沢井	新人
4 沼田 真由	1975.10.20	5月	6か月	赤田	14年
5 藤田 史香	1975.10.17	5月	6か月	赤田	14年
6 岡田 千子	1975.10.7	5月	6か月	赤田	14年
7 末田 真之	1975.7.23	6月	10か月	大口	2年
8 長坂 真希	1975.11.18	6月	6か月	小西	14年
9 丸木 輝	1975.9.21	7月	9か月	沢井	新人
10 瀬戸 大翔	1975.3.20	9月	6か月	小西	14年

(諏訪きぬ編著『かかわりのなかで育ちあう一信濃町保育園保育者研修の三年間』フレール館1992 P.75)

5年間の担任一覧

表3. 5年間の担任一覧

氏名	0歳クラス(ひまわり)	1歳クラス(つばき)	2歳クラス(たんぽぽ)	3歳クラス(すずめ)	4歳クラス(はら)	5歳クラス(のり)
1 中村 基子	担任	担任	担任	担任	担任	担任
2 大石 南	担任	担任	担任	担任	担任	担任
3 小林 杏あり	担任	担任	担任	担任	担任	担任
4 沼田 真由	担任	担任	担任	担任	担任	担任
5 藤田 史香	担任	担任	担任	担任	担任	担任
6 岡田 千子	担任	担任	担任	担任	担任	担任
7 末田 真之	担任	担任	担任	担任	担任	担任
8 長坂 真希	担任	担任	担任	担任	担任	担任
9 丸木 輝	担任	担任	担任	担任	担任	担任
10 瀬戸 大翔	担任	担任	担任	担任	担任	担任

次は民間園の担当制の事例ですが、ベトナムから来たご夫妻を支えています。相互理解が深まれば深まるほど、にっちもさっちもいなくなる状況も生まれやすけれども、信頼感で結ばれば、深い支援ができるということでもあります。このような事例を通して、担当制保育のよさを感じとって頂けるのではないで

担当制保育

① 高学歴・高齢出産親子を支える

- ・ 東京都内 公立Z保育園
- ・ AとB:0歳児クラス 10月生まれ 第一子 二卵性双生児



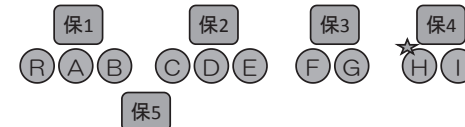
- ・ 母親:42歳 デザイナー
- ・ 父親:45歳 デザイナー

(小川晶「保護者支援」2011報告資料)

担当制保育

② 親子の生活を支える

- ・ 東京都内 私立T保育園
- ・ H:0歳児クラス 10月生まれ 第一子



- ・ 母親:研究職、ベトナム人
- ・ 父親:民間企業会社員、ベトナム人

(小川晶「子育て支援の中の保育」2012報告資料)

て上がっていますね。全部の先生をもち上がりにはできませんけども、一人の主要な先生がもち上がっていくことで、子どもたちの安全基地を用意していくという取り組みです。私は、この園に3年間、園内研修という形で入れてもらいました。先生方が夜遅くまで熱い議論をたたかわす輪の中に身を置いて、わくわくどきどきさせてもらいました。

また別の園では、個別に対応するために、一人一人の日課をつくって対応しているところもありました。そこでは一人一人に対応するために、A先生、B先生、C先生・・・の細かい動きを整理しています。担当の子どもひとりに丁寧にかかわっているときに、あとの担当の子を誰が見るかというように配慮することまで配慮して、担任間の連携を明確にしている園もあります。

その後も私は、ずっと自分が望ましいと思う保育を実践してくれる園を探し、その園とタグを組んで研究と実践に取り組んできました。その中の一つに新宿区立S保育園の3年に及ぶ園内研修があります。スタッフ研修の仲間入りをさせてもらい、その実践をまとめた本が『かかわりのなかで育ちあう』(フレール館1992)という本です。この中で、今は亡き岩田恵美子園長がこんなことを述べています。「子どもからの

ようか。

もつと以前に、担当制と持ち上がり担任制をやっているという公立園に出会ったこともあります。この斜め線が引いてあるところが持ちあがり担任制です。ゼロ歳クラスをもった繁田先生が1歳クラスについて上がり、1歳を受け持った繁田先生が2歳クラスについ

⑥ 信濃町保育園保育者研修の三年間

* 新宿区立信濃町保育園との出会い

1989年4月～1992年3月までの3年間、私は園内研修に参加し、夜遅くまで討議を続ける保育者集団のムンムンする熱気の中にいた。

仮説の意味や意義を話し合い、保育実践の進め方やその切り取り方などについても発言した。そこには公立園のマンネリ化とはほど遠い、活き活きとした保育者集団があった！



* 保育実践のテーマは「子どもの全面受容」

岩田園長は自らの保育を“保育者主導の保育だった”と振り返り、悔恨のなかから新しい保育を模索していった。“子どもからの保育”は、「子どもの全面受容」に始まり「子どもの自立」へと発展する。「保育園だからこそ子どもは育つ！」と言い切る岩田園長の信念が、「子どもの内面での物や他児へのこだわりが必然的に保育者と子どもとのべったりとした依存関係を断ち切り、「子ども自身が子ども関係の中で自立していく」その姿を見事に捉え描き出した集団保育の書を生み出したといえよう。

(原訪きぬ編著『かかわりのなかで育ちあう—信濃町保育園保育者研修の三年間—』フレーベル館1992 P.208)

④ 個別的な日課の実施

表1 0歳児 ひよこ組 日課 (抜粋)

時間	B (7か月)	E (9か月)	G (12か月)	I (14か月)	K (16か月)	O (18か月)
7:00	起床	起床	起床	起床	起床	起床
7:30	ミルク	ミルク	朝食	朝食	朝食	朝食
8:00	登園	登園	登園	登園	登園	登園
9:00	遊	遊	遊	牛乳	牛乳	牛乳
10:00	遊	遊	外遊び	外遊び	外遊び	外遊び
11:00	40食事	30食事	45食事	00食事	00食事	00食事
12:00	遊	遊	遊	遊	遊	遊
1:00	遊	遊	遊	遊	遊	遊
2:00	遊	遊	遊	遊	遊	遊
3:00	00	00	00	00	00	00
4:00	ミルク	ミルク	おやつ	おやつ	おやつ	おやつ
5:00	降園	降園	降園	降園	降園	降園
6:00	降園	降園	降園	降園	降園	降園
7:00	降園	降園	降園	降園	降園	降園
8:00	降園	降園	降園	降園	降園	降園

表2 2歳児 うさぎ組 日課 (抜粋)

時間	A (17か月)	B (17か月)	C (17か月)	D (17か月)	E (37か月)	F (37か月)
7:30	登園	登園	登園	登園	登園	登園
8:00	遊	遊	遊	遊	遊	遊
9:00	牛乳	牛乳	牛乳	牛乳	牛乳	牛乳
10:00	遊	遊	遊	遊	遊	遊
11:00	食事	食事	食事	食事	食事	食事
12:00	遊	遊	遊	遊	遊	遊
1:00	遊	遊	遊	遊	遊	遊
2:00	遊	遊	遊	遊	遊	遊
3:00	遊	遊	遊	遊	遊	遊
4:00	遊	遊	遊	遊	遊	遊
5:00	降園	降園	降園	降園	降園	降園
6:00	降園	降園	降園	降園	降園	降園

柴崎正行・諏訪きぬ編著『21世紀に向けての保育の創造』フレーベル館p.

⑤ 担任間の連携—食事時間の子どもの活動と保育者の仕事—

時間	子どもの活動	保育者の仕事
10:00	月曜の強い子は...	月曜の強い子は...
10:45	月曜の強い子は...	月曜の強い子は...
11:00	月曜の強い子は...	月曜の強い子は...
11:15	月曜の強い子は...	月曜の強い子は...
11:30	月曜の強い子は...	月曜の強い子は...

保育は、子どもの全面受容に始まり、子どもの自立へと発展する。保育園だからこそ子どもは育つ」と言い切っています。子どもの内面での物や他児へのこだわりが、保育者にべったり甘えていた子を保育者から引き離していく。だからこそ、保育者が子どもを全面受容して甘えさせても大丈夫なのだとも言っています。子どもの本質に深く迫る実践を通して、こういう確固としたメッセージを保育者や保護者に発せられる園長になっていったのですね。

この他にも同じスタイルで『保育が変わるとき』(1990)、『保育者が変われば保育が変わる』(2003)などの本をまとめましたが、保育者と協働してこれらの本をまとめられたことを、今なお、大きな喜びとしています。保育現場は、一定の保育条件に縛られつつも、子どもをどう安全に保育し、子どもに安心感を与えていくか、ギリギリのところまで工夫しています。その営みを掬い取り、保育の質を担保する方法として定着させていくことが、遅々とした歩みのようではないでしょうか。保育の場に足を運び、保育者と一喜一憂しつつ保育データを集め、分析し、保育のあり方を共有していくことが、今も、重要な営みだと思います。

3. 3歳未満児保育の拡大と保育の課題

大急ぎでまとめをさせていただきます。3歳未満児の保育がどんどん拡大する時勢を迎えて、何よりも大切にしたいのは、幼子たちが安心していられる保育の場を創出することです。最近、子どもの安心安全を守るとは・・・で、よく用いられているのがこの「安心の輪」の図です。この図は、アタツチメント理論を下敷きにして、子どもが大人（保育者）に甘え、見守られながら自立に向かっていく状況を示しています。この両手を広げているのが親でもあり先生でもあります。子どもが「わーん」と泣いて先生や親のところへやって来ます。大人に「痛い、痛い、飛んでいけ！」と慰められると、けろっとしてまた遊び出しますね。その「痛い、痛い、飛んでいけ！」がとても大事なわけです。その子の痛みや怖さに共感し、それを取り除き、その子に安心感とさらに新しいことに挑戦しようという勇気を与えることは、その子に寄り添っている保育者や親にしかできないことなのです。言い換えれば親や親しい大人がやってあげるべき慈しみなのです。

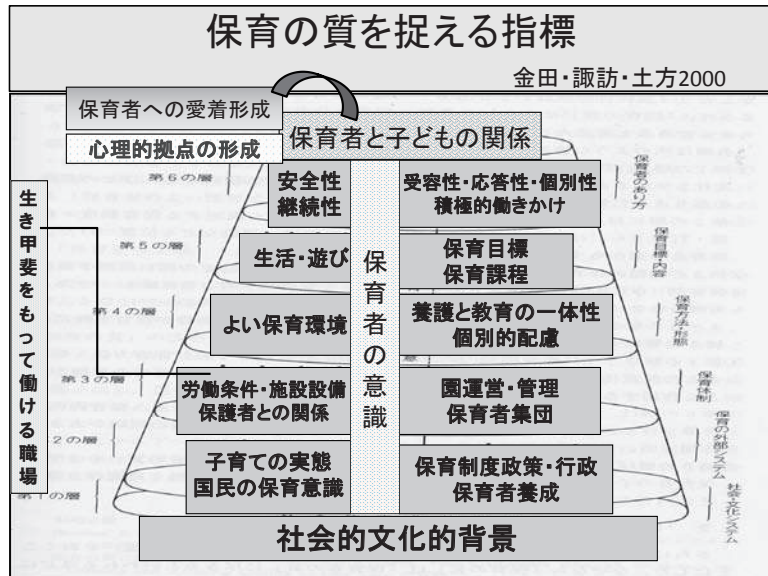
3歳未満児保育が拡大する中で、子どもが心底、安

心して暮らせる園、子どもの心の拠り所のある園をどうつくり出していけるかが、わが国の保育の大きな課題と思われまます。他者との協調性と自立性に富んだ子どもを育てることは、少子化日本の行く末を考えると、非常に重要なことです。「先生同士あまり話し合えない」とし、「話し合っているいろいろなことをする時間がない」という愚痴もよく聞きます。そんな状況の中で「保育をよくするなんて、とてもとても・・・」というのが多くの園の実情かと思えます。しかし子どもにはよい保育を届けたいとお思いになりませんか。ところでみなさんはどんな保育をよい保育と思われまますか。子どもはよく「見て！見て！」って言いまますよね。子どもは、大人の眼差しを受け止めると、「見てもらえている」という安心感を抱いて、あれこれチャレンジします。そこで転んだりぶつかったり失敗したりする。

この保育の質を捉える指標は、私たちの研究仲間で作ったものです。保育の社会的文化的背景とか政策・条件などは下の方に、そして一番上に保育者と子どもの関係が置かれています。保育室の広さや充実した施設設備ももちろん必要ではありますが、子どもにとってみれば保育してくれる人が自分を思いやってくれ、励ま

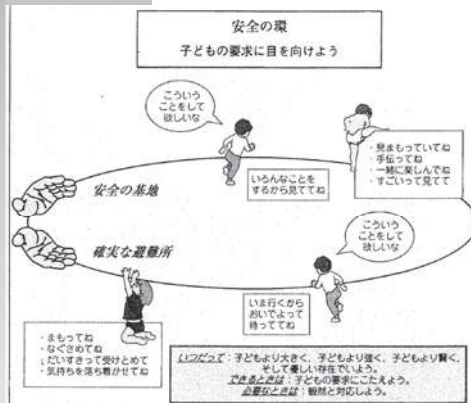
保育の質を捉える指標

金田・諏訪・土方2000



⑦ 安全基地・心理的拠点の形成

図7 安心の輪



元資料：Web page: Circleofsecurity.org © 2000 Cooper, Hoffman, Marvin & Powell (北川恵訳) をもとに作成。

れつつ心踊るような体験ができ、疲れたら甘え、そこを拠点として再び飛び出していけるような保育者との関係があれば、しあわせですよ。是非、みなさまの力を合わせて、よい保育を創りだす努力をしてください。

最後に、落ち着きのあるよい保育を展開するための工夫を紹介しておきましょう。一つは子どもが自ら遊びやすい場をつくってあげることです。おもしろそうなどころがあれば、子どもはひとりじめに保育者から離れて、集中して遊びます。遊ぶところが用意されていないと、まとわりついたり、子ども同士で駆け回ったり、大変な事態になるわけですから、まずは子どもの遊ぶ拠点を一つついでいくといいのではないかと思います。ここが保育者と子どもの関係と並んで大事な点です。そうすることによって子どもの動きも変わってきます。保育環境を変えることでいろいろな変化が目に見えますから、先生方も、「やったー」という充実感を味わうことも出来るわけですね。

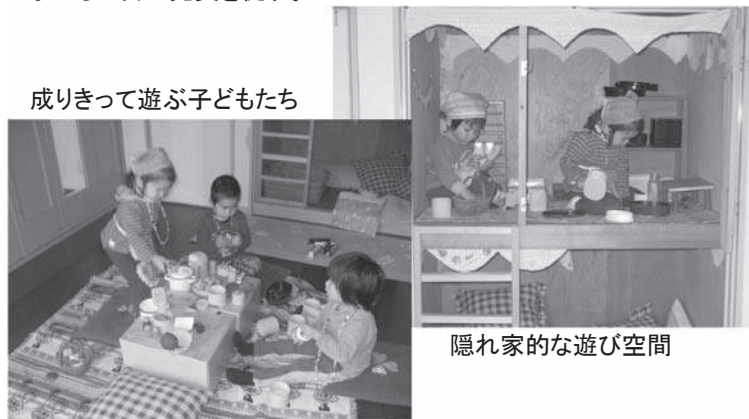
これは、うちのよつばのおうち（地域保育所）の写真です。押し入れを改造したりして、隠れ家にもなり、自由に遊べる場にもなっております。子ども自身であそこに行けばお母さんごっこができるとか、絵本を見たいときはあそこへ行こうとか、子どもの見通しの立つ環境をつくれれば、子ども自身が動き出すわけですね。

二つ目は、保育環境づくりをさらに推し進めると「食・寝・遊の分離」になります。食べるところ・遊ぶところ・寝るところを分けて、子どもが生活の見通しをもちやすくする取り組みです。実際に工夫した園では、保育者がある場に立つだけで、子どもの方は「ああ、ご飯だな」とか、「お着替えするんだ」とか、次の行動の見通しをもって動こうとしています。保育者がいちいち口で言わなくても、保育者がその場にいることで、ちゃんと並んで順番を待つような行為が幼い子どもにもできるようなのです。

三つ目には、そのように整えた保育環境の中で、保育者が子どものみため・つもり・ごっこ遊びにどうかかわるかです。ここが、保育者が子どもの内面を理解し共感するための決め手と私は思っています。子どもの満足感・充足感を満たすうえでとても重要な点です。子どもは自分がいままで見聞きたことを心にとめて、みため・つもり・ごっこ遊びの中で再現しようと懸命です。泥団子をもってきてくれたとき、そこにどういうイメージがかぶせられているかを素早く推量し、その子のイメージに寄り添うことが大切なのです。子ども自身のイメージにピタッと合った言葉を聞いた

子どもが見通しのもてる・選べる保育環境①

子どもの興味関心を引き出す保育環境をつくり、子どもの自発性を尊重することが遊びに集中し、継続して活動する子どもを生み出し、子どもの自己充実を促す。



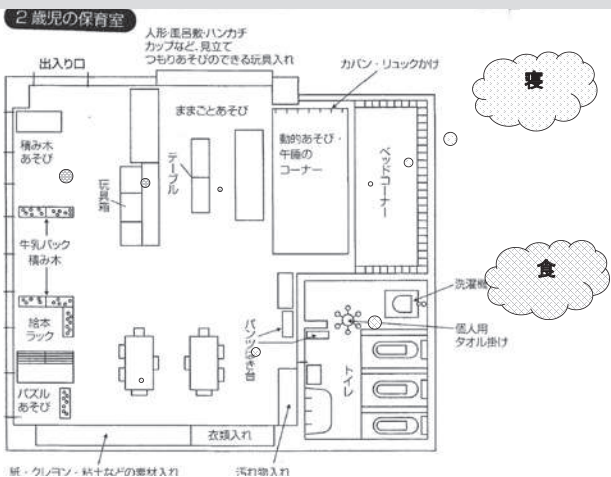
隠れ家的な遊び空間

成りきって遊ぶ子どもたち



③食・寝・遊の分離

(ききょう保育園+諏訪きぬ 『ききょう保育園の保育計画(保育課程)』新読書社 2008 P108)



必要となる対人関係の調整



子どもは、「僕をわかってくれた!」「私をわかってくれた!」「せんせい、だいすき!」と思うでしょう。1歳児クラスでの出来事ですが、宅急便屋さんになって配達に来たMくん。大きなビニール積み木を「ハイ、おみかん」と担任のH先生に渡しました。ところが先生は箱に入った蜜柑とは理解できなくて、怪訝そうな表情をします。意図が通じなかった2歳半のMくんはパニックに陥って、そのビニール積み木を部屋の隅めがけて投げつけ、床にうつ伏せに……。子どもの遊びはその子自身をかけた真剣勝負なのだと思わされた事例の一つでした。

最後は、結局、「保育者と子どものかかわり」に戻ってきました。子どもとの応答性豊かな保育が出来れば、先生方も「疲れた、疲れた」、「ああ、今日も子どもに振り回された」「担任同士の関係が嫌だった」と疲労感をため込む生活から、「ああ、子どもとあんなことをしゃべって楽しかった」「あんなことを言っていたとスタッフ同士で話し合えた」と子どもに寄り添う保育者本来の心もちに立ち返ることが出来るのではないのでしょうか。

子どもとのやり取りを記録し、大人の応答を消すと、子どもの気持ちが表れた口頭詩を創ることも出来ます。そういうなにか「楽しい保育の世界」を先生方が切り開いていけることを期待したいと思います。それには園長先生や主任先生にもひと頑張りしていただく必要がありますね。庭のない保育園が次々にできるとき勢ですから、保育には困難が付きます。ここでコンタクトをとる園長先生を中心にして、中間のリーダーの方たちがそれぞれの場をまとめていくこと、そして何よりも大切にしていただきたいのはクラスの中のまとまりです。

わーっと広い保育室の中を大勢の子が走り回っていたら、ちょっと区切ってみて、小グループの保育を試みるだけでも、落ちついた保育に変わると思います。そうした先生方のちょっとした工夫が、子どもに拠り所を与え、安定した生活をもたらすことでしょう。0歳児から保育を受ける子どもが拡大している時代だからこそ、疲れただけに終わらないで、子どもと心を通わせ合い、先生方同士も気持ちを通じ合わせ、「これをやってみたらおもしろかった!」という工夫と発見を積み上げられる保育を展開していただくことを期待しております。そこにはこういう保育がしたいという「保育アイデンティティ」やこういう保育者でありたいという「保育者アイデンティティ」が育まれていくで

おわりに

保育アイデンティティの形成を！
保育者アイデンティティの形成を！

保育スタッフが生き甲斐をもって働ける職場を！
保育スタッフが子育てと仕事の両立のできる体制を！

しよう。そして何よりも重要なことは、母親の子育て支援の最前線で奮闘する先生方が「生き甲斐をもって働ける職場」で「保育スタッフが子育てと仕事を両立できる体制」を手にすることだと思います。そのことが子どもたちの未来を拓き、大きな子育て支援になると思います。

（どうもご清聴ありがとうございます。（拍手））

【前川】 どうもありがとうございます。非常に経験に基づき蘊蓄のある話をありがとうございます。

時間の関係で、前半はこれで終わりたいと思います。

〔休憩〕

〔再開〕

総合討論

【前川】 貴重な質問を多数いただきましたが、演者が熱心に講演し過ぎたので、時間がありません。演者1人ずつ、今の親にどうしてつき合うかという回答のヒントを話してください。それから、いただいた質問は、僕らが回答して、それを雑誌『ふたば』に載せませう。それで勘弁してください。現在の20〜30代の親の対応について沢山の質問がありました。現在の親の置かれている状況と対応のヒントについて話します。

現在は殆ど総ての家族がスマホ、タブレット、ゲー



ム機は持っています。TV、ビデオは総ての家庭にあり食事中も動画を見ており、家族の会話はみられませんが、触れ合い育児が行われていないのです。「触れ合い」とは人間同士のスキンシップ（声を掛けながら抱っこする、声をかけながらさする、抱っこして母乳を与えるなど）スキンシップによる子育てです。現在の20歳代から30歳代の母親は携帯を使い放題、核家族で周囲に支援する人が殆どおらず、子どもをどう育てて良いか判らないのです。

日本の子どもは自己肯定感が低いと言われてます。この感情は、誰からも必要とされない、誰からも大切に思われていない、生きる価値がない人間などの感情です。これが育っていないとその後の人生がまともに生きられません。親の言う事を聞く手が掛からない良い子が多いのです。子どもが持つ欲求や反抗を抑えており親子の関係が希薄、自己肯定感が低いのです。自尊心・自己肯定感を育てるには子どもの良いところを見付けて、伝え誉めます。子どもが家族のことをしたときは「有難う」と感謝します。子どもが家族の一員であり、有意義な存在であることを・・・機会あるごとに子どもに伝え、理解させます。子どもは自分の存在が家族や周囲の人に役に立つ価値ある存在であ



ることを理解します。

自己肯定感を育てるには、泣いたらかまってる、子どもの話をよく聴いてやる、気持ちをやんでやる、テストが60点でもそれを認めて誉める、有難う、よくやったなど、言葉で伝えます。子どもは嬉しい、喜ぶ、生きていて呉れて有難う。有難うは最高の褒め言葉、親や大人は殆ど言いません。

スマホ子育ての問題を複雑にしているのは、現在の20代から30代の母親は携帯をやり放題で、触れ合い子育てをされた経験がない親が多く、兄弟も少なく、赤ちゃんを抱いた事もなく、子どもの育て方をまったく知らないからです。

「子どもを産んだら子育てが出来る」の考えは間違いです。母親になるには、時間と支援が必要で20歳になるまで支援が必要です。社会が複雑になっているので、ゆつくりと親になるための支援、相談が必要なのです。

お産の後の母親は共同養育のシステムがないので不安定、イライラ、自信喪失の状態にあります。園は保育の専門家が乳幼児の面倒をみて育てる、現代版の共同養育の場の一つの考えられ、現代のママたちに対応するのに最も適当な場と考えられます。

せん。子どもが騒ぐ時にスマホを使わせると子どもはまた使いたがります。使いたがるから、また使わせる。使用頻度が益々増えて行く。子どもの抵抗が強くなるから益々取り上げ難くなってきます。長時間毎日使うようになります。依存状態になってしまいます。多くの保護者は良くないと思いつつ「おとなしくして欲しい」と思つてスマホを使っています。世間の目が冷たいからです。赤ちゃんが泣いたら、ギョロッと睨まれます。子どもが走りまわったら、うるさいなどという顔をされます。他の人に迷惑が掛からない為にスマホを使っているのです。

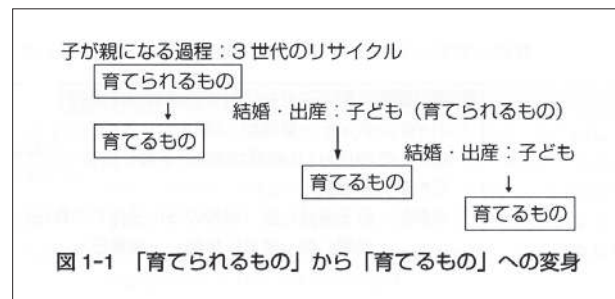
1983年にファミコンが発売、生まれたときから家でゲームができる環境、85年から90年ビデオの普及、録画してみるのが当たり前、ゲームボーイが1989年、物心がついたときからやっている、中学生、高校生になったときには携帯はやり放題です。

テレビやゲーム、携帯で育ってきているのです。実験よりメディアの間接的体験の方が多いため、人との関わりはあまり得意ではありません。特に、人との関わりが深くなる思春期に携帯に頼っているの、人との関わりがあまり上手でない人が多い。自分でいろいろの事を体験していない、失敗体験も少ない、成功

母親への対応は

- ① 母親を全面的に受容する。スマホ育児は現代社会の犠牲者と考える
 - ② 母親は赤ちゃんと同じ5か月、未熟親、子育てが出来なくて当たり前
 - ③ 親の良いところを見つけて伝え、ほめる。親は自分が好きになれないと子どもを好きになれない
 - ④ 親子と一緒に楽しく遊ぶ、自分の子の楽しそうな様子に親心が刺激される
 - ⑤ 親の話に関心を示し、全面的に受容する
- 乳幼児は我慢する力がある

今の殆どの親は「触れ合い」により育てられていない。子どもをどう育てて良いか判らない。



した体験も少ない、自己肯定感・自尊心が低い。親の責任ではない、時代の犠牲者なのです。赤ちゃんを育てるのに必要なことを知りません。赤ちゃんに関わったことがない、判る筈がないのです。どんな親でも子どもに良くなって欲しいと思っています。子育ての知識や経験が全くない、現在の母親を支援するのはこのことを知らなければなりません。泣き叫んでどうにもならない乳児を泣きやませる方法の一つがスマホ育児なのです。園で子どもの元気な姿を見せ、親心を刺激してください。「してみせて、言つて聞かせた、させてみた、誉めてやらねば、親は育たない」根気よく、親を育てて下さい。母親は現代社会の犠牲者なのですから。

【井原】 私は、楽しい人生だったというふうにお話ししましたけども、前川先生の「縁」といっては何ですか、小児科なのに全体の雰囲気がとてもよくて、私は早稲田大学を出ているんですけど、東京慈恵会医科大学を母校と考えるぐらい、雰囲気がよかったですね。

だから、そついでの中で育てられたんだというふうに今日気づきまして、いろいろ悪いことが、私が始めたころから、親に問題があるんだよねというふうに一般的には言われていたので、ところが、お会いすると、

全然そんな感じがないんですよ。
私も親になって、子どもを育てながら、何か両方で、私は商人の子どものなので、けちなのか、やっぱりもつけたほうが良いというふうには、幾ら批判したって、そこから何も生まれないので、そんなふうと一緒に育ち上がっていくほうが絶対お得だというか、そういう感じまでやってきたんだと思います。

あと、長くやっている、やればやるほど、そのよさというのは、経過がだんだん見えてくるんですよ。だから、お母さんとかお父さんというのは、先がどうなっていくかということが見えないみたいで、そこが一番心配されていて、それは例えばボウルビィの、先ほど諏訪先生、懐かしく出てきましたけど、預けたり何かやっていたら非行少年になるよって、それは



ているところじゃないかなと。

皆さんにそうやって諏訪先生は伝えかけられていましたけど、現場で見たことというのは、時代が変わろうと理論が変わろうと、変わらないんですよ。そこに自信を持って、かつ、頑張れば頑張るほど自分が先が見えてくるので、私はお母さん方に、私は別にいろいろなことを知っているわけじゃなくて、今まで会ってきたお母さんたちの交通整理をして次の人に伝えられていることをよく言っていたことがありますけどね。年齢がいけばいくほど、楽しみですよ。年をとっていく、経験を積んでいく楽しみというのを。

それから、矛盾していますよね。3歳までは母親が言いながら、労働力として駆り出すというか、そういうごまかしていったばいあるの、現場で見たことというのが一番大切なことなんだと。それをもってすれば、そんなに母親と話して厄介だったなど、もちろんそういう方もいらっしゃいますけど、そこは一步下がって、自分がこの人を受け入れる度量がないかなというのを考えてみることもやりました。

こういういいことばかりしゃべると、楽な人と会ったんじゃないかって思われるかもしれないけど、そんなことはないんですよ。そうではなくて、自分の粹

根拠がないですよ、ほほね。ということ、後で否定されたり、大体ああいうはやった思想というのは、後に学術的に否定されていても、それは伝わっていないんですよ。

だから、やっぱり諏訪先生の話を聞いていて、前川先生も現場で、私も現場でやってきたほうなので、そういう理念とかね、3歳までは母親がという、それって私は、最近、聞くのが悪いですけど、ということ、それって個人主義の考え方で、社会を閉じたものにするし、インターネットも最初はすごく、今、前川先生も触れられましたが、みんなが簡単につながるといふものだったはずなのに、タコつぼ化していますよね。許し合える、許可をもらった人だけが何をしているって、それ、全然つながってなくて、異質の人とはつながらないというか。

もう一つ考えましたけど、事業の宣伝みたいになっちゃいますが、慈恵大のよさというのは、変わった人を受け入れるふところの深さがあったって、そういう人が後におもしろい人になっていくというか、そういう人々って、別に変った人じゃなくて、実際、現場で物を見ていた人、それは私も前川先生も諏訪先生も、特に今日、諏訪先生の全体像を初めてお聞きして、共通し

を広げていって、そうすると、自分の子育てがとても楽になりましたし、という感じですね……、と思います。

ということ、ここまでにしたいと思います。

【前川】 それでは諏訪先生。

【諏訪】 私もお願いする側の母親でもあったので、大変な母親だったのかもしれないですけども、私はほんとうに先生方に助けられたなと思っています。



無認可共同保育

所のときには、たまたま妹の結婚式がありました、赤ちゃんをどうするか。大変だったわけです。そうしたら、「私が家に連れていって一晩面倒見てあげるから」とか、「留め袖も貸してあげるわよ！」とか、ほんとうに公私ともど

も親身にいろいろお世話になりました。そのときの先生方は、一人はバスの車掌さんから共同保育所の先生になった無資格の方、もう一人は夜間の保育学校に通って資格を取るというingの先生でした。

でも、今思い出してみますと、ほんとうにハートがある先生たちだったわけですね。要するに、バスの車掌さんがなぜ保育園の先生かということなのですが、自分の子どもも預けて保育料を出せば、何も残らないのに・・・。無認可共同保育所ですから、賃金は安く苦労は大きいのに、なぜ保育者としてそこを支えてくれたかというと、妊娠してバスの車掌をやめなければならなかったという女子労働者としての悔しさなんですね。だから、お母さんたちが働き続けられるように支えていくという気持ちで彼女を無認可共同保育所の先生にしたのだと思います。

だから、私は、素敵な先生に出会ってきていますので、有資格、無資格にあまりこだわらないで、誰でもいいじゃないかという思いもあります。ただ、集団的にたくさんのお世話をしていく、保育をしていくとなると、やっぱり一定の保育理論とかある保育方法論とか、そういうものにも習熟した、専門性というものも必要になってくるわけですね。

生方の専門的な目で見直していただきたいですね。私が印象深いのは、ハンガリーの保育園で一週間ほど観察に入れていただいたことがあるのですが、子どもが持つてきたものをちゃんと子どもが見えるように並べておく棚があったんです。ある子は乳首、ある子はぬいぐるみ、ある子はバスタオルの切れ端とか、そういう子どもが大事に抱えてくるものをみんな並べてあるんですよ。そして、子どもが眠くなったときに、ちょっと乳首をあげると、ちゅちゅと吸いながら眠りについていく・・・いい光景ですよ。

なかなかハッピーでしょう!? 取り上げられたら、わっと泣く。先生たちはわざわざ子どもに意地悪しているわけですねなぜ取り上げるかといえば、先生方が迷惑だからです。ハンガリーの園では、これはとって大事なものだから、ここに置いておきましょうねと子どもの気持ちを受けとめる、そのひと工夫だけで泣かせないで済むし、子どもを親切に受容できるし、それが「移行対象」という保育理論に添うことになるわけですね。

今まで当たり前前と違ってやっているようなことをちよっと変えていくためには、保育者の専門性も大切ということですね。このものが子どもにとってお母さんが

これは私が共同で研究していた園で出てきた事例ですけれども、「うちの子には絶対に半ズボンを履かせないでくれ」というお父さんがいたわけです。そこは父子家庭で、怪我なんかされたら大変なわけで、絶対に半ズボンを持ってこないわけですね。でも、子どもにしてみたら半ズボンを履きたい。園のものを履かせることもできるけれど、子どもがしゃべったら、すごいトラブルになるわけですね。それをどうやってお父さんにうんと言わせていくか。その園では、子どもを半ズボンにして、怪我もしないで明るくやっている姿を小出しに伝えていく方法をとりました。子どもが集団の中にきちっと位置づけられ、受け入れられていく姿を語ることによって、お父さんもしぶしぶながら納得したというか。

もう一つ、井原先生のご専門ですけれども、子どものお気に入りのもの、『ぬいぐるみの心理学』ですが、子どもはお気に入りのものを持って登園したがりますね? 大きい子どもですとポケットの中にそっと入れていたり、小さい子どもではぬいぐるみを持ってきたり・・・。先生方はその場合どうされます? 取り上げますか?

そこに保育理論を照射してほしいのです。そこを先わりを果たすいかに大事なものと知れば、むげには取り上げられない筈。井原先生によれば、子どもと親が分離して、親のイメージが子どもの中の住み着くようになるまでの間それが必要になるということですね、それはやっぱり保育理論、子どもの発達論なんです。

ですから、そういうものは、保育者が単に人柄がいだけではなく、集団の保育に責任を負う保育者の学びとして、子どもの気持ちに沿った保育が展開でき、そして親御さんもそこから学ぶことができるような保育者になっていただきたいと思っています。

ありがとうございます。

【前川】 諏訪先生、ありがとうございます。それから私への質問で「グレーゾーンとは何か」というのがありました。私のレジュメにも出ていますが、関り方の程度で、希薄な人と、強過ぎる人の程度がグレイゾーン、レッドゾーンでひどくなるほど子どもの心は育たなくなるといふことです。

【諏訪】 私にも「親が自分で過剰・希薄なかかわり方に気がつく方法を知る方法は何ですか」という質問があります。

一般的な話でいけば、過剰にかかわれば、子どもは

嫌がりです。子どもを見ていれば分かるのではないかなと思います。ネグレクトは、逆にかかわらないわけですから、「ママ、ママ、ママ、ママ」ってべばりついできますね。「甘えることは自立への道」と前川先生もおっしゃいましたけど、子どもは基本的には大人が自分を受け入れ接してくれることを求めているわけです。しかしそこで満たされると、そんな抱っこばかりされているのは窮屈ですから自ら離れますよね。そしておもしろそうなものがあつたら、絶対に子どもはそちらに行きますね。

ですから、そういう子どもの動きとか表情とかで見ていくしかないと思いますね。実際に「過剰・希薄」をはかるリトマス試験紙はないので・・・。それがあれば楽ですけど。

【前川】 もう一つ「ここに生みの親と育ての親と、それから里親なんかで愛着形成が違いますかという」というご質問にお答えします。これは、亡くなられた庄司順一先生がいろいろな問題がある子を自分の子と一緒に育てているのです。ですから、生みの親、育ての親じゃなくて、いかにその子に愛情を持って育てようとしているかだけです。生みの親だから何だ、ほかの親の子だから何だって、そんな考えで子どもを育てて

いたら絶対に子どもの心は育ちません、それは子どもに対する愛情です。

皆様、これもちまして本日のシンポジウムを全て終了させていただきます。

ご清聴まことにありがとうございます。(拍手)

【会場の皆様から頂いたご質問とその回答】

質問1 (匿名)

3歳児の子どもが、自分の思い通りにならず泣いて訴える。

母親も最初は優しく声をかけたりしていたがおさまらず、つい手を出してしまった。そのことに反省し、悩んでしまう。

母親も第二子を出産したばかりであり、本児に少し自立してほしいと思うこともあった。

この際、保育士としての様に保護者へ声をかけると良いのか。

(その際、母親は本児の気持ちを受け止めているし、理解はしている)

本児の気持ち・・・自分を見てほしい、自分だけを愛してほしいなど。

回答1 (前川)

人間は脳が未発達で未熟な状態で生まれてきます。その後10年以上の歳月を掛けて、ゆっくりと成長していきます。その過程でママ達を悩ませるのが2歳頃から始まる「イヤイヤ行動」です。その原因は、脳の表層にある「前頭前野」と呼ばれている部分はまだ機能し始めていないことにあります。前頭前野は、目標達成のために衝動的な欲求を抑える脳機能の中核です。これが未発達のうちには、脳の中心付近から湧き起こる本能的欲求を抑えることができず、イヤイヤ行動が引き起こされてしまうのです。母親を悩ますイヤイヤ行動は子どもの脳が発達している証拠で、このことを理解し対応すべきものです。何かするときは「これから〇〇をしたいのだがいい?」「〇〇と〇〇とどちらがよい?」と子どもにたずね、選択をさせ、イヤと言ったらそのまま暖かく見守ってください。母親は自立させようと悩む必要は全くありません。〇〇ちゃん大好きと抱きしめてあげてください。4〜5歳になれば我慢できる嘘みたいによい子になります。第1子は第2子が誕生すると今まで独占していた母親を取られてしまうので、赤ちゃん返りやいろいろの行動をします。母親

は発育的に未だ無理な第一子に自立を要求します。

すればするほど子どもは反抗をします。保育園では母親の代わりに沢山スキンシップをして、甘えさせてください。言葉は自然と解決します。イヤイヤ期は正常な子どもが通る通過点プロセスで少しも心配するものではありません。このことを母親に伝えて安心させてください。

質問2 (保育園の方)

グレーゾーン、イエローゾーン、レッドゾーンについてもう少し具体的に知りたいのですが。

回答2 (前川)

子どもの心は母親の養育態度に影響されます。子どもを思う母親の愛情が強すぎても、弱すぎても心は育ちません。母親の「関わり方」には「過剰な関わり方」、「適切な範囲の関わり」、「希薄な関わり方」の三種類があります。それらの程度がひどくなるほど心は育たなくなります。過剰な関わり方と希薄な関わり方はグレーゾ、イエローゾーン、レッドゾーンと程度がひどくなるほど、心が育たなくなります。希薄な親の関わり方は親自身のことを優先して

考え親役割や責任に欠けている、子どもの生活リズム・生活習慣・衣食住などが整えられない、子どもの発達に合わせた対応・時間共有ができない子どもの意図・サイン・気持ちを読み取れず、寄り添うことができないで、ひどいと虐待の一種、ネグレクト、心理的虐待となります。過剰な関わり方の親は力を持って子どもを制する、子どもを否定・否認する態度を示す、威圧的な言葉掛け・叱責を行う、怒りを子どもにぶつけて制御する、子どもに過剰な干渉をする、ひどいと身体的虐待、心理的虐待となります。

質問3 (匿名)

午睡中直前に、軟膏塗布しています。しかし、2オクラスは、順番に午睡させていて少しでも話すとおこられます。子どもたちが声をかけてほしいような瞳や声をかけてくれるので、つい一人一人におでこにスキンシップして「おやすみなさい」と声をかけてしまい、また、おこられてしまいますが、このような行動はしない方がよいですか？

回答3 (前川)

昼寝の時間に寝たい子は昼寝する、起きていた子

はおきているなど発達の幅を尊重する保育園もあります。園長先生の考えに従うしかありません。

質問4 (保育園の方)

前川先生のお話の中で希薄な関わり方についてお話がありました。現在、私の勤めている保育園では、多くの子どもたちが9時間保育園で生活し、中には朝9時から夜20時まで、園で過ごしている子どももいます。土曜保育を利用する子どもも多く毎週6日間保育園で長時間生活するのは、子どもの生活リズムに合わせたり、時間共有ができると思えます。時間の長さよりも、過ごす時間の質が大事という考えもわかるのですが、親と過ごす時間と保育士と過ごす時間の長さのバランスに疑問を感じます。親への理解を示しながら、子どもとの時間を取ってもらいたいことを伝えるのがいつも難しく感じます。諏訪先生の資料の中のよい保育と保育の条件(3-7)について、保育スタッフの資格水準とありますが、現在の保育士不足によって十分に保育者として学びがないまま、保育士として働いている保育士も多いように思います。資格水準を上げない限り保育士の資質の向上は難しいのでしょうか。

回答4 (前川)

希薄な関わり方は親の悪い養育態度で、保育園に長時間子どもを預け、親との接触が希薄になり、子どもに悪い影響を与えることではありません。担当している乳幼児を可愛いと思う、保育していればその心配はありません。忙しくても乳幼児が出すサインに6割以上対応していればその心配はありません。乳幼児の世話をする人の人間性の問題です。資格を厳しくしても解決はしないと思います。

保育園不足で保育士も不足し、経験不足の保育士が多くなると問題ですが、園長の力量にもよります。諏訪きぬ先生にも回答を頂きたいのですが時間が無くて申し訳ありません。

質問5 (幼稚園の方)

近年、家族のありかたに多様性が見られます。産みの母親が育てないケース、母親と血縁関係のないケース(養子、継母、里親等)の場合の愛着形成は、どこまで可能ですか？産みの母親の愛着形成と違いは出ますか。

・親が自分で「過剰」「希薄」な関り方に気が付く方法、知る方法がありましたら、教えてください。

回答5 (前川)

産みの親でなくても育てる人の育て方で愛着形成はできます。

育て方で愛着形成は可能です。養育態度は自分では判りません。保育園などの第三者が気付き、親を全面的に受容し、信頼関係ができたところで、それとなく注意したらよいと思います。自分の欠点や短所は自分では気づき難いものです。失敗をして、直そうと努力すれば改善されます。努力は続けることが必要です。

質問6 (保育園の方)

超理系の母の方がおられます。初めてのお子さんを満1才からお預かりしています。子どもの体調管理は体温と便の様子、食べたものの量はグラム単位とCC。「経験上」の話で100%ではないんですね」と殆ど聞く耳持たずです。どう接し、知らせたらいいのか、迷っています。

回答6 (前川)

母親が要求してくる食事の量などで保育園が特に困らなければそのまま継続してください。保育園としてはそれと並行して子どもの体調を一

緒に記録してください。そして体温など母親が要求しているものと何が関係しているかを調べてください。体温、便性、食欲などが関係するのではないかと思われまます。母親にこの関係を示し保育園での記録はそれだけにしたらよいのではないですか。食物アレルギー以外は食欲で代用できる筈です。保育園は預かっている乳幼児に公平に手を掛けるべきです。親の不必要な要求は断つても良いのではないでしようか。その前に母親との人間関係を良くしてからの話です。その理由を聞いてから実行してください。以上思いつくままに伝えさせて頂きました。

質問7 (匿名)

自己肯定感が赤ちゃんの時から感じられるようにと、見守りや声掛け、そして母子が離れて(保育園児)生活する日常が不安にならないように、愛着関係も大切にしながら保育できるように心がけております。

昨年より、赤ちゃんの心の寄りどころとなるよう「0才児〜2才児まで全員に一人一体専用のお人形(赤ちゃんぬいぐるみ)」をいつでも手に届くところにおいて、人形に対して愛着関係が少しずつ思いや

りの心が育つようにしています。

大人の関わり方が一番大切かと思いますが、大切にされている自分と考えると0才児の赤ちゃんにはお人形は適切なのか疑問でもあります。

(現在は、お人形を大切にしている人の姿を見せるようにしています)

まずは、0才児の赤ちゃん本人が大事にされることなのかなと思うのですがいかがでしょうか。

回答7 (前川)

これは移行対象の事だと思います。幼児期前半にかけてタオル、毛布、人形など手元に置き、それを取り除くと不安になるものです。これは自己肯定感や愛着形成とは関係ありません。乳幼児に人形を与えたからと言って、それが移行対象になるとは限りません。乳幼児が自宅からそのような移行対象を持参した場合は、保育園にいつでも取り出せる棚をつくり、そこに置いておいたらどうでしょうか。乳幼児の自己肯定感や愛着形成に役立つのは触れ合い子育てと子どもの良い所をみつめて誉め、子どもに伝えることです。問題は保育する人の養育態度ではないでしょうか。

質問8 (保育園の方)

こどもが育つ為に必要な「母親的」「父親的」役割がありますが、最近の保護者の多くは、子どもの間違った全面受容(子どもの言いなり)が多くみられ、主に「父親的」役割を園が担っているように感じます。園では、子どもの年齢に合ったルールを守ることができますが、母親との関係では、やりたい放題。そのことで、保護者の皆さんも手をやいて困ってしまい相談を受けることが多いです。どのようなアドバイスが良いかヒントをいただけますと幸いです。

回答8 (井原)

実生活で父のとる大変さ、成長のチャンスは訪れます。そのお手本を園が示してあげているという共有があるといいですね。

父さんは社会で働いているときに。父性を示しておられるはずですから。

質問9 (保育園の方)

家庭で、兄弟のいる子(第一子)への関わりを、一対一でのスキンシップや肯定的な関りをもつ時間を作ってほしいが、見ている限り母は幼少期そのよ

うな関りが少なかった。(上手く関わり方が分からない様子。とても真面目な性格で、計画通りにならな

いとイライラしてしまう。今は育休中だが4月に復帰する不安を抱え、第一子は少しずつ「保」への甘えやイヤイヤ期を出している。母にどう伝えていいのか悩んでいます。

回答9 (井原)

イライラしないで、必要な時に肯定してあげるところを増やせばいいと思います。子どもはまだまだ少しの母や親の態度の変化に反応しますよ。

質問10 (匿名)

18ページの表の見方。このシンポジウムに参加できなかった職員に伝えるためのポイントを教えてください。

回答10 その1 (井原)

18ページの表の見方 発達心理学と育て直しの重ね合わせの図ですね。例えばこの発達の指標は心理学というよりも、むしろ保育学で、よくであう事象でしょう。一番左が、より小さい年齢です。例えば、ミルクのような言葉(解釈)は、発達心理学的にみて、人生の初めに環境としての母親からしてもらう

こと（母親とは限らない）ですが、私は症例の中で小さい時のこうした、全面的に命を肯定してもらった体験をしていない人で、そのことがケースの展開点でもとても重要な意味を持つ事態に出逢ったのです。つまりカウンセリングで出てくる、欠けたものへ気づくことによって、普通は気にならない発達心理学上のポイントがあるのだと気付いたのです。そんな目で見ると、例えばみなさんも目にされること多い、バンドエイドを貼ってあげることが、手当てすることという事象であり、この表では4歳くらいになっているので、その持つ意味が意識的にも分かり、そうであるがゆえに人にも要求するので、目につきやすいものです。しかしこれが必要なポイントであるということを知っていると、こちらの接し方や態度が的確で有効なものになるのです。17のインデックスがありますので、想像を膨らませて、思いを巡らせてみて下さい。本としては、「子育てカウンセリング 育てなおしの発達心理学 福村出版」をご覧ください。参考になると思います。ただし、このインデックスについて詳しく話している講義が、現在おります早稲田大学人間科学部の「eスクール」という通信教育で聞くことができます。

回答10 その2（前川）

アタッチメントは乳幼児が恐れや不安を感じたときに特定の人（主に養育者）を「安心・安全の基地（安全基地）」として認識し、くっつくようにする、生まれながらにして備わった行動システムです。アタッチメントの理論は精神科医ボルビーによって築かれました。アタッチメントの個人差は臨床心理士エインワーズにより開発されました。この手続きは次の八つのエピソードからなっております。

第1エピソード 導入場面

親子を部屋に案内して、親子それぞれの場所を指示する。

第2エピソード

親子が部屋に一緒にいて、子どもはおもちゃを自由に探索する。

第3エピソード

そこに、見知らない女性が入ってきて、1分間は黙って座っているが、次の1分間で親とおしゃべりをして、最後の1分間で子どもと関わる。

第4エピソード

見知らない女性が子どもと関わっている間に親が退出する。

見知らない女性と子どもだけの場面となる。

第5エピソード

親が部屋に戻ってきて子どもと再会する。
見知らない女性は退室して、親子だけの場面となる。

第6エピソード

親が子どもにことわってから、子ども一人残して退室する。

第7エピソード

先ほどの見知らない女性が部屋に戻ってくる。

第8エピソード

親が戻ってきて子どもと再会する。見知らない女性も退室する。

エインズワースはBタイプ（安定型）、Aタイプ（回避型）、Cタイプ（両価値型）の三つのアタッチメント・パターンに分類しました。その特徴は次の通りです。

Bタイプ（安定型）

親を安全基地として利用して、再会時には親を歓迎し、分離によって機嫌が悪くなってもすぐに機嫌が直ります。これが安定したアタッチメントです。

Aタイプ（回避型）

一人で遊び、親にほとんどかわることなく、再会時には親を回避します。

Cタイプ（両価値型）

はじめから遊ぶことができません、再会時には親に抗議を示したり、抱かれたがっているのに降りたがるという両価値的な行動を示し、ずっと不機嫌が続きます。

AタイプとCタイプが不安定なアタッチメントになります。

重要なことは、こうしたSSPでみられる個人差は家庭訪問で観察された行動と対応するものです。つまり、Bタイプの子どもは家庭でも親がいる限り機嫌がよく活発に遊び、Aタイプの子どもは何かとすぐに親に対して怒りを示してすねてしまい、Cタイプの子どもは家庭でもぐずぐずといて不機嫌が続きます。

アタッチメントは子どもの発達の基本でこれが正常に育っていないと、その後の心の発達が障害されます。「育て直し」により改善しますが、異常を早期に気付いた方が支援は容易です。保育園に養育者が迎えに来たときの乳幼児の行動でアタッチメント・

パターンがある程度推察されます。どのタイプが予測されるかです。

その後の研究によりメインはどのタイプにも属さないDタイプ（無秩序・無方向性）が存在することを発見しました。これは虐待を予測されるパターンとされています。

*近藤清美・アタッチメントの個人差（チャイルドヘルス22巻2号、2019. 2. 15-18ページ引用）

質問11（保育園の方）

4月から新年度に変わり、新入園児も入園し、環境も変わります。保育士の関りも含め、どのような体制、慣らし保育の方法をすることで、お子さん一人一人が安心した園生活を早く送れるとお考えですか??

回答11（諏訪）

新年度入園の親子さんに奨めて、年度末から入園までの間に、親子で園に来てもらいます。私たちの研究グループでは、この方法を「親子同時通園」と呼んで、途中入園の方々にもお奨めています。子どもは、安全基地である親と一緒に新しい場に入

ば、心のゆとりもあり、新しい環境を眺め、そこにいる子どもたちへも関心を向け、保育者にも馴染みます。新年度の保育士が決まっている場合には、そのクラスで受け入れるか、新年度のクラスで受け入れるか、工夫されるといいのではないのでしょうか？

この方法は、殊に育休明け前の親には、活用しやすい方法です。また新年度開始一週間くらい、朝の受け入れスタッフを固定して子どもが馴染みやすい雰囲気を作っているとこもありますし、担当制をとっている園では、出来るだけ担当者が受け入れるように努めています。子どもが保育士に安心感をもつように、どう工夫するか、皆さままで話し合いをなさるとよいでしょう。

質問12（保育園の方）

親から見た子どもへの関わりの視点と保育者側の視点が違う場合、どのように親支援アドバイスをして理解してもらったら良いのか。

回答12（諏訪）

親が子どもにベタベタさせないという方針をもっているかと仮定した場合、アタッチメントを求める幼児子どもの発達欲求とは明らかに反していることに

なります。そういう親は、バンとアタッチメント理論の正論を説いても、恐らく理解しようとしなないでしょう。親が突き放していれば、子どもは不安定な状況を現して、親もいい子だと思えていないのではないかと思われます。子どもの欲求に添って、保育士が安全基地を提供し、子どもの情緒が安定すれば、表情や行動が大きく変わります。その愛らしくなったわが子の姿に親が気がついたとき、アタッチメントの必要性を伝えれば、効果的だと思います。実際に、事例であげた担当制で双子の高齢出産の母親は、長い時間をかけて、その大切さに目覚めていきました。

質問13（認定こども園の方）

認定こども園となり、土曜保育も行っている。1才2才児の方は土曜日利用した子どもは、ウィークデーの親が休みの時に一緒に休んでもらっているが、幼稚園のほうは6日続けてくる子ども多い。こうした子に対して、先生方も一所懸命対応しているが、淋しさの姿、ストレスとみられる姿などに可愛そうに思う。親も生活があるのでどこまで許容すれば良いか困っている。

回答13（諏訪）

あなたの園の保育システムに通じていませんので、具体的にお答えできませんが、お子さんの淋しさやストレスを保育者が親に代弁するのはとても難しいことですね。親御さんがセカセカ迎えに来て、子どもの手を引っ張って帰るようなお迎え風景をよく見ます。保育者も大変でしょうが、ちよつと踏ん張って、子どものその日、頑張った姿をさり気なく伝えて、「おうちでもお子さんと**を一緒にしてみてください」など、親子の楽しい関わりのヒントを伝えてみてはいかがでしょう？ お子さんの愛おしさを心に向けてゆとりを親が取り戻せば、「ちよつと早くお迎えを・・・」とか、「週休二日の週は・・・？」とか、時には言えるかもしれませんね。パートタイムで働く母親ほど、就労条件が厳しいのが世間一般の場合もあります。先生方の頑張りにも限度はあると思いますが、スタッフのお話し合いを重ねて、個々の家庭状況に合わせた適切な対応なさいますよう期待しています。

質問14 (保育園の看護師の方)

看護師として勤務し主に0才児クラスの保育に入っています。担当制はしていませんが、保育士の個性と経験により自然に懐きやすい子どもが、保育士によりできており、難しい保護者には自然とリーダーが対応できる様になっています。

アタッチメント理論も保育士に理解され幼児担当保育士と乳児担当に分かれてきています。

このまま、幼児専門保育士と乳児専門保育士となっていくのでしょうか。

回答14 (諏訪)

確かに子どもと保育者の相性のようなものはありますね。あなたの園の場合、それを前提に、スタッフの方々が穏やかに対応されているようで安心いたしました。アタッチメント理論を下敷きにされて保育を展開されていることも、親子にも先生方にも幸せなことと思います。乳児保育と幼児保育は専門性が異なりますので、分けることもいいのでは・・・と私は考えています。ハンガリーなどでは、3歳未満の乳児専門園に接続して、上階に3歳以上の園が設けられていました。ゆったりとおおらかな保育士さんに抱かれたら、幼子は安心するでしょう。保育

士の持ち味が活かされたらいいですね。どうぞスタッフの気心を合わせて、優しい保育を続けてください。

質問15 (保育園の方)

0～2才までのアタッチメントの重要性は、とても理解ができます。3歳以降、途中入園等で5才児入園で形成ができていないお子さんに対しての園での愛着形成の仕方を伺いたいです。

現在受入れるようにしていますが、その様子を見た、安定していた子どもたちの間に同じようにされたいという思いができてきたのか、クラス全体が甘えが強くなっている様に思います。

また、甘え(愛着)を中心に考えると、子どもの主体性に重点をおくと、しつけの部分が少しおろそかになる様に感じる保育者(年配の保育者)がいます。

このバランスをどの様に、お考えになりますか？

回答15 (諏訪)

アタッチメントは、0～2歳の子どものだけに必要なものではなく、私たちが生きていく上で、一生必要なものと思っています。人が他者に親しみを覚え、その人に受け入れてもらい、心を委ねること

質問16 (匿名)

「保育園だからこそ子どもは育つ」と言い切れる岩田園長先生の信念が通じる園ばかりではなく、むしろ、保育士不足の現在、非常に難しいことだと思います。

又、大人の労働時間短縮、働き方改革が言われる中、保育時間は延長延長と伸ばされ、又、病児保育まであります。

それを利用する方、又、利用せざる人もいるでしょうが、子どもの保育時間はどうなるのでしょうか。

回答16 (諏訪)

日本の保育政策は基本的に間違っていると、私は思います。ワーク&バランスは、人間らしく生きていく上で大切な基本原則ですよ。国民全体が、ゆとりある生活が出来るように、国や企業がきちっとしたポリシーをもつべきではないでしょうか。その努力をしないで、家庭と仕事の両立を、保育園だけに被せているように思います。その犠牲者は子どもです。庭のない園の保育室で長時間過ごさせられる子どもたちが健全に育つと誰が確信をもっているのでしょうか？ そんなことは「子どもの全面受容」を試み、「保育園だからこそ子どもは育つ」と言い切

が出来たら、私のように後期高齢者になっても幸せな気分になります。人が、恋人や夫などに求めるものも、アタッチメント的な感情に他なりません。だから5歳の子にも、不安定であれば、あなたの園で試みられているように、特別メニューで遇してあげることは素敵なことだと思います。そしてその姿を見た他の子どもたちが甘えたくなるのも、赤ちゃんが生まれた際、上の子が赤ちゃん返りする姿と似て当然の姿です。

私たちは、みな自分が一番に愛されたいと欲求しています。「愛としつけのバランス」を真っ先に考えるのではなく、お食事の後とか、帰りのときとか、ある時間や場を設定して、「今日はあのつく女の子をハグしちやお！」とか「今日は先生、黄色のお洋服が大好きになった！」とか「先生とかけこっして勝った子を抱っこしてあげる！」とかいろいろ工夫して、大勢な子どもとのアタッチメント実験を試みてくださいませんか。

子どもたちは、気持ち満たされたら、きつときまりや約束事を守り、自立的に行動するようにになります。それがしつけ。先生のアクティブで楽しい実践を期待しています。

った岩田園長も許しません。彼女は、組合活動にも熱心で、保育者の働く権利にも確かな見識をもった人でした。アメリカでホームステイをさせてもらった家庭のご主人は、公務員でしたが、朝7時半ごろに出勤して、夕方5時には帰宅。広い庭の芝生に水撒きして、ゆったりした暮らしをエンジョイしていました。西欧でも延長保育などはほとんどなく、朝は早くから働くけれども、夕方のお迎えは早いように思いました。大体バカンスの取り方が違いますよね。「遊ぶために働く」と言い切れたら、人生、豊かになるような気がしますね。私も「働き人間」で齢を取ってしまいましたが、残念な気がしていません。



【講師紹介】

前川喜平 (まえかわ きへい)

東京慈恵会医科大学名誉教授
神奈川県立保健福祉大学名誉教授
日本小児保健協会名誉会長
日本タックケア研究協会名誉会長
小児科と小児歯科の保健検討委員長
第100回日本小児科学会会長
東京慈恵会医科大学卒業後、同大学小児科教授
神奈川県立保健福祉大学教授を経て、2010年より衣笠老健施設長
1996年より(公財)母子健康協会主催のシンポジウム統括を努める、同協会理事。
主な著書

「小児の神経と発達のかた」(新興医学出版社)
「乳幼児健診の神経学的チェック法」(南山堂)
「小児の神経と発達のかた」(新興医学出版社) など

井原成男 (いはら なりお)

臨床心理士
1950年鹿児島生まれ
1968年鶴丸高校卒業
1972年早稲田大学文学部心理学専攻卒業
1980年早稲田大学大学院博士課程心理学専攻終了(発達臨床心理学)
1980年東京慈恵会医科大学小児科カウンセラー
1985年東京慈恵会医科大学助手、以後30年間小児科医局員、退局後、小児科同窓会賞を受ける。
1992年国立公衆衛生院母子保健学部母性保健室長
1996年東京大学大学院教育学研究科助教授

諏訪きぬ (すわ きぬ)

1998年大東文化大学教育学部教授
2000年お茶の水女子大学生活科学部発達臨床学講座教授
現在 早稲田大学人間科学学術院臨床心理学系特任教授
及び お茶の水女子大学名誉教授
著書
子育てカウンセリング「育てなoshi」の発達心理学(福村出版)

NPO法人さやま保育サポートの会代表理事 保育サポート研究所長
元明星大学大学院教授(教育学・保育学)
元日本保育学会評議員
略歴
兵庫県神戸市生まれ
名古屋大学大学院修士課程修了後、名古屋大学教育学部助手。稲沢女子短期大学を皮切りに保育科、幼児教育学科で保育者養成に当たる。
鳥取大学教育学部では小中学校教員養成のほか、家庭科(保育)担当教員として、家庭の育児問題に取り組み。
明星大学では、保育学を担当し、学部で4年制の保育士養成コースを創設。通信制大学院では現職をもつ社会人の研究指導に勤しんだ。
現在、豊島区子ども子育て会議会長、豊島区社会福祉事業団評議員、社会福祉法人育和会評議員。

著書
集団保育と母子関係(明治図書)、母親の育児ストレスと保育サポート(川島書店)、保育者が変われば保育が変わる(新読書社)、現代保育学入門(フレール館)、母親が求める「子育て・子育て支援」と課題(フレール館)、保育における感情労働(北大路書房)、「保育」の大切さを考える―新制度の問題点を問う―(新読書社) 他